

ISSN 1349-0915

九州大学大学院
芸術工学研究院 紀要

Geijutsu Kogaku:
the Journal of Design
Kyushu University

2022 | Vol.

36

芸術工学 研究

芸術工学 研究

九州大学大学院
芸術工学研究院 紀要

Geijutsu Kogaku:
the Journal of Design
Kyushu University

2022 | Vol.

36

[目次]

作品

- | | | | | |
|---|--|-----------------------|------------------------|-----------------------|
| 1 | 中村哲医師メモリアルアーカイブ
The Dr. Tetsu Nakamura Memorial Archive | | | |
| | 田上健一
TANOUE Kenichi | 池田美奈子
IKEDA Minako | 伊原久裕
IHARA Hisayasu | 石井達郎
ISHII Tatsuro |
| | 尾本 章
OMOTO Akira | 大井尚行
OI Naoyuki | 秋田直繁
AKITA Naoshige | 工藤真生
KUDO Mao |

資料

- | | | |
|----|---|---------------------|
| 13 | 中国の考古資料にみられる拍手
Hand Clapping Found in Chinese Archaeological Materials | |
| | 陳 晟宇
CHEN Shengyu | 矢向正人
YAKO Masato |

中村哲医師メモリアルアーカイブ

The Dr. Tetsu Nakamura Memorial Archive

田上健一 ¹ TANOUE Kenichi	池田美奈子 ¹ IKEDA Minako	伊原久裕 ¹ IHARA Hisayasu	石井達郎 ¹ ISHII Tatsuro
尾本 章 ¹ OMOTO Akira	大井尚行 ¹ OI Naoyuki	秋田直繁 ¹ AKITA Naoshige	工藤真生 ¹ KUDO Mao

Abstract:

Dr. Tetsu Nakamura, who devoted himself to medical activities and an irrigation project called the Green Earth Project in Afghanistan and Pakistan for a long time, was killed by a bullet in Jalalabad, Afghanistan on December 4, 2019. This paper reports on the outline of the design for the Exhibition Space of "Dr. Tetsu Nakamura Memorial Archive" at Kyushu University.

1. はじめに

長らくアフガニスタンとパキスタンで医療活動や緑の大地計画と呼ばれる灌漑事業等に尽力した中村哲医師は、2019 年 12 月 4 日アフガニスタン・ジャララバードで凶弾に倒れた。

「中村哲医師メモリアルアーカイブ」は、中村哲医師の志やメッセージを次世代に伝えるため、ペシャワール会¹⁾等関係者の協力を得て、2021 年 3 月に九州大学中央図書館 4 階きゅうとコモンズ（ラーニングコモンズ）内に設置され公開されている²⁾。この「中村哲医師メモリアルアーカイブ」は、著作のデジタル化保存と公開を目的とした「著述アーカイブ」³⁾と「展示空間」で構成される。

本稿では、「中村哲医師メモリアルアーカイブ」の「展示空間」に関わるデザインの概要について報告する。

2. 展示空間

「展示空間」は、「繋ぐこと」を大きなテーマとしている。ひとつの小さな空間体験により、中村哲医師が描こうとした世界を感じ、繋がっていくことを意図したからである。また、その世界を「屏風絵」のように表現しようと試みている。

「展示空間」ではこの大きなテーマのもと、「一人称」のメッセージ（中村哲医師自らの「言葉」と「視点」）、「拡がり」へのタッチポイント（共感と呼び起こす世界への拡がりへの出発点）、「探求」へのエントランス（「医」「水」「農」をキーワードとする知的世界への探求の入口）、という 3 つのコンセプトを基本とし計画を進めた。

小さな空間体験は、メッセージ・スクリーン、映像、音、グラフィックス、照明、著書と展示台、検索用タブレットとそれらの相互作用で構成されている。

連絡先：田上健一, tanoue@design.kyushu-u.ac.jp

¹ 九州大学大学院芸術工学研究院
Faculty of Design, Kyushu University

3. 屏風絵

メッセージ・スクリーンとして、浮遊し透過しながら拡がりをもつ「屏風絵」を設置した(写真1、2、4、5)。

緩やかな曲率の10mの繊細な「屏風絵」に包まれることで、中村哲医師が捉えようとした世界の、拡がり、深さ、連なり、奥行きなどを捉えようとしている。「屏風絵」は極薄半透明ポリエステル材を使用し、プロジェクター投射による映像を浮かべている。また、中村哲医師自らが技術指導した癩病患者用サンダルがサインとして床面にデザインされたポイントに立つと、小型超指向性スピーカーから中村哲医師が語りかける。

6台の書籍展示台を配置しているが、自然に著書を手に取り向き合うことができるように、天板高さや形状、面仕上げを検討し、軽やかなメッセージ・スクリーンと調和するように仕上げています。

4. 映像

「屏風絵」としてのメッセージ・スクリーンには、日本電波ニュース社が長期に渡り現地記録してきた映像資料と中村哲医師が遺した言葉で紡いだ約5分間の映像と音が流れる。映像制作にあたっては、「人間は愛するに足る。真心は信ずるに足る」「100の診療所より1本の用水路」という中村哲医師の自らの言葉を手がかりとしている。

冒頭、中村哲医師の挑戦が始まったヒンズークシュ山脈を描き、ヒンズークシュ山脈最高峰ティリチミール登山隊の医療チームへの同行、医療の行き届かない辺境地域への巡回診療、診療所の設置、そして拠点病院の建設など医療体制充実へ奔走した足跡を映し出す。

さらに日照りや大干ばつを目の当たりにして、医療だけでは解決できない現状、荒れた地に人々の生活を取り戻すための井戸の再生や無謀ともいわれた用水路の建設を実現した経緯を辿っている。現在、干上がった荒地は緑豊かな大地へと変貌し、建設した用水路は65万人の生活を支えるに至っている。現地の多くの人々も描写され、その緑の大地の風景でエンディングを迎える。「医療」から「井戸」、そして「用水路」。それらは違う方向のようであるが、「人を助ける」という中村哲医師の「大義」のもとで、活動と人々との関係とが用水路のように一つの線として繋がっていく様子を、実写と手描きイラストを用いて映像表現している(写真1、2、4)。

5. ガラススクリーン

展示空間と閲覧室の間の大きなガラスは、閲覧室からの視認性が高く、来訪者の視線を惹くメディアとなる。そこで、

遠方を見つめる中村哲医師の横顔とグラエ・ヌールの山々を配し、中村哲医師がアフガニスタンで見た景色や思い描いた世界へのタッチポイントとした。また、著書から引用した6つの文を配置している。これらは九州大学の複数の学部学生が数ヶ月にわたる読書会を通して、議論を重ねて選んだものである。雄大な山脈を背景に、中村哲医師が大きな視点で語りかけるかのように、縦組みでゆったりとレイアウトしている(写真1、2)。

展示空間内部の方立ガラスにも、九州大学の学生が選んだ7つの文を配置している。これらは対照的に、中村哲医師の迷いや自らを奮い立たせようとする内面的な文を長めに引用し、来訪者が近づいて味わえるように視点高さに合わせ小フォントで配置した(写真6)。

6. 円柱年表

展示空間内の既存角柱をモニュメンタルな円柱へ変更し、中村哲医師の生誕から死までの出来事を、写真とともに螺旋状に配して一連の物語として生涯をたどれるようにしている。円柱は古代より物語を後世に伝えるメディアとしての役割を担ってきたことも参照されよう。

円柱上部には「中村哲医師メモリアルアーカイブ」ロゴタイプを配し、来訪者の視線を瞬時に捉え誘導することを狙っている。円柱を巡りながら視線を下から上へと滑らせ中村哲医師の生涯を体感する(写真3)。なお、円柱の年表と地図はアーカイブとあわせて制作したリーフレット(A2)にも展開し、アーカイブを離れても中村哲医師の軌跡を容易に参照できるグラフィックとした(写真7)。

7. おわりに

わたしたちは、自らの意志で境界のない世界をさまよひ、自らの身体で探索・発見し、そして人々とともに新しい世界をつくっていく。このメモリアルアーカイブは、中村哲医師の単なる業績紹介のためではない。ふつうでは到底捉えきれない、そして見えないことも意識する、その世界へと「繋ぐ空間」である。この小さな空間体験が、学生の将来の財産となることを期待したい。

謝辞

本計画にご協力頂いた、ペシャワール会、日本電波ニュース社、渡邊公一郎・前九州大学副学長、九州大学中央図書館など、すべての関係の皆様にご心より感謝致します。

注

- 1) 1983年9月に中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成された国際NGO(NPO) <http://www.peshawar-pms.com>
- 2) 2021年3月21日報道公開
- 3) 中村哲著述アーカイブ <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/nakamuratetsu/>



写真-1 閲覧室から1

閲覧室から繋がる中村哲医師メモリアルアーカイブ。円柱年表の先にメッセージ・スクリーンが配置された奥行のある繋がりを損なわないように、照明器具やプロジェクターを設置。半透過のメッセージ・スクリーン手前を明るく、奥を暗くすることによって映像の鮮明さを損なわずに空間が繋がっていく。



写真 -2 閲覧室から 2

ガラススクリーンに浮かぶ中村哲医師の横顔と山脈。透過率の高いシートを用い、遠近感の表現とガラス断面も意識した色調のデザイン。



写真 -3 円柱年表

直径寸法 (1450mm)。天井埋め込みの照明器具を用いるため、暗くなりがちな最上部はカットして明暗差がすぎないように工夫している。



写真-4 メッセージ・スクリーン

半透過スクリーンを用いているため、裏からも映像が見える。プロジェクターがまぶしく見える範囲を最小限にするよう設置位置と投影角度が調整されている。閲覧室側がより明るい照明デザインによって、スクリーンの存在は目立たない。



写真 -5 アプローチ

メッセージ・スクリーンは最小限のフレームで、伸縮性素材が美しい曲面となるテンションを実現している。天井面の超指向性スピーカーにより空間の静けさを保ちながらの音声再生が可能となった。

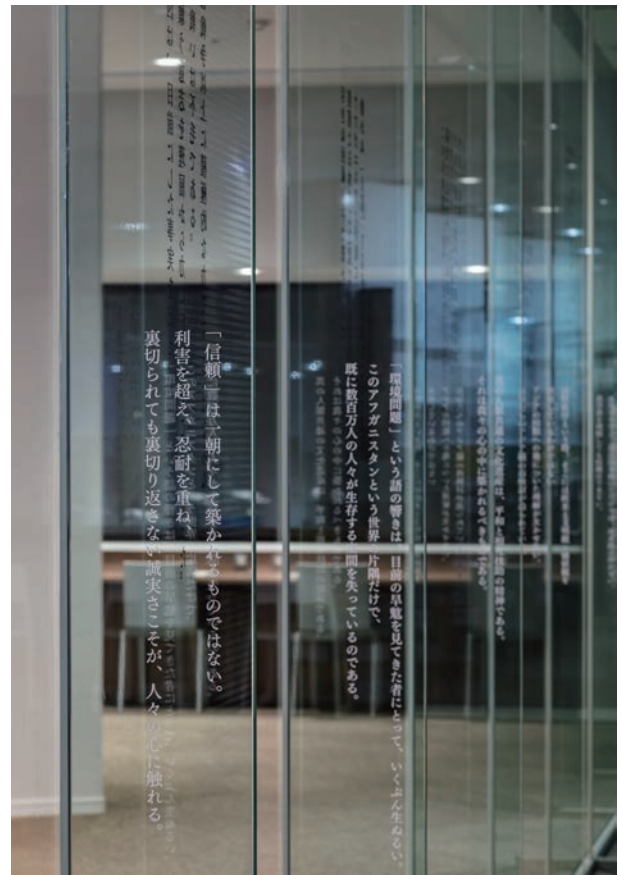


写真 -6 ガラス面に配された中村哲医師の言葉

中村哲医師の言葉の奥に展示空間がみえる(左)。ガラス方立に連続する中村哲医師の言葉(右)。



写真-7 メモリアルアーカイブ リーフレット

展開はA2サイズ・外6ツ折リクロス2ツ折リ/蛇腹5山。アーカイブ設立に際しての関係者の文章を表面に、地図を背景に年表を裏面に配し、出来事が起こった時と場所を紐づけて理解できるようにレイアウトした。中村哲医師の写真は、全てモノクロ切り抜きにして存在を際立たせた。

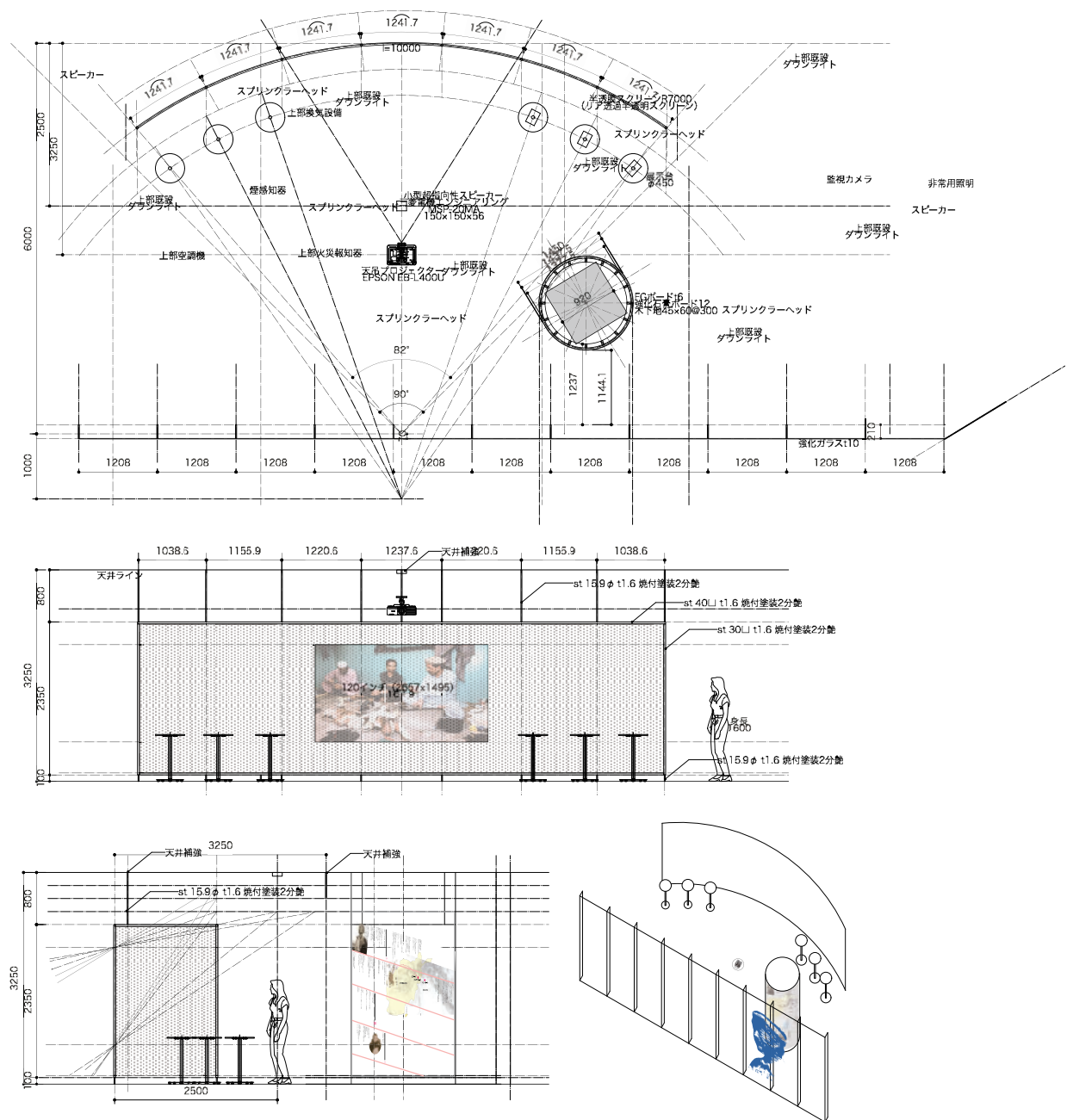


図-1 配置図 (SCALE 1/100)・平面図 (SCALE 1/100)・立面図 (SCALE 1/100)・断面図 (SCALE 1/100)・アクソノメトリック

作品データ

所在地／福岡市西区元岡 744 九州大学中央図書館

主要用途／展示空間

設計

建築／田上健一

マネジメント／池田美奈子

グラフィック／伊原久裕 工藤真生

映像制作／石井達郎

音響／尾本章

照明／大井尚行

什器／秋田直繁

堀優子（九州大学附属図書館 e リソース課）

施工

施工管理／キヌガワ福岡（手嶋俊輔）

構造・構法

フレーム構造／St30 □・St40 □焼き付け塗装

スクリーン／KINUGAWA STRETCH FORME 2WAY

工程

調査・調整・設計期間／2020 年 7 月～2020 年 12 月

工事期間／2021 年 2 月～2021 年 3 月

設備

照明／パナソニック電工

スピーカー／三菱電機

プロジェクター／EPSON

写真

針金洋介

中国の考古資料にみられる拍手

Hand Clapping Found in Chinese Archaeological Materials

陳 晟宇¹

CHEN Shengyu

矢向正人²

YAKO Masato

Abstract

This paper examines the origins of clapping through Chinese archaeological materials. The authors found clapping figures in archaeological artifacts from the Warring States (475-221 BC) to the Sui Dynasty (581-618). This paper has identified fifty examples of artifacts that appear to be figures in the process of clapping or may depict clapping in archaeological artifacts from the Warring States to the Sui Dynasty. Since some of the artifacts have a high likelihood of showing clapping and others have a low likelihood, we first ranked them according to their likelihood using the available materials and reports. Next, we examined the characteristics of the shapes and depictions in these objects, and how they were expressed. The results showed that there were many examples of clapping to music or as part of a performance, but not so many examples of clapping hands for admiration by the audience. We also confirmed that there were various ways to depict clapping, such as the positional relationship between the hands and the body, the way the hands are spread, and the direction of the hands.

1. はじめに

本稿は、拍手することの起源について、中国の考古資料を対象に検討する。拍手は、両掌を合わせるという行為と、音を発するという行為とから成る。このことを踏まえ、本稿では、漢代及びそれ以前の考古資料から、音を発するために手を拍つという仕草を造形することを意図し、あるいはその仕草が描かれている可能性がある例を取り上げ、それらの造形や描写について、どのような特徴や表現方法があるのかを検討した。

中国古代の文献において拍手と解釈される記述が現れる最古のものは、戦国時代（前 475-前 221）に書かれたとされる『周礼』及び、同時期の『韓非子』（前 280 頃-前 233 頃）である（秦・矢向 2017:25, 矢向 2021:25）。漢代になると、『戦国策』（前 168 頃-後 8 頃）に、手を拍つとする記述が複数箇所みられる。また、『史記』（前 104-前 91）には、拍手よりも手拍子が拍たれたと解釈される記述がみられる。『史記』「世家」には、「初趙盾在時 夢見叔帶持要 而哭甚悲 已而笑 拊手且歌 盾卜之 兆絶而後好^{*1}」（趙盾がまだ在世のとき、夢で、先祖の叔帶が腰を支えながら哭泣して甚だ悲しげであったが、ややあつてから笑い、手を拍って歌ったのをみた。盾が占ってみると、その兆象に「家が断絶するが、のちに又栄える」とでた）（吉田 1979:576-577, 秦・矢向 2017:27）とあり、この時代に拍手あるいは手拍子をとる習慣が存在したことがわかる。これらの記述を背景に、本稿は、漢代を中心とする考古資料を対象に、拍手あるいは手拍子をとることが象られている可能性がある例についての調査結果を報告する。

連絡先：矢向正人, yako@design.kyushu-u.ac.jp

1 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コンテンツ・クリエイティブデザインコース

Content and Creative Design Course, Department of Design, Graduate School of Design, Kyushu University

2 九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門
Department of Communication Design Science, Faculty of Design, Kyushu University

2. 中国考古学研究の現状

漢代において、拍手する動作が明確に認識されていたとするなら、その時代に拍手を造形した遺物が存在しても不思議はない。しかし、それを考古資料から見いだすことは容易ではない。本稿で取り上げる出土遺物においても、確かな情報を入手できていない例が多い。筆者の1人は2019年8月に、河南省、浙江省、上海に現地調査に赴き、俑などの考古資料に関する情報入手を試みたが、そこで困難に直面することになった。

まず、中国における考古学資料の現状について述べておこう。張慶捷の『考古発掘報告積圧問題』によると、中国における考古学の発掘調査は1920年に始まるが、大規模な発掘調査は1979年の改革開放後からである。以後の30-40年間に、中国全土で数多くの考古学プロジェクトが実施されている。しかし、張によると、約半数の考古学調査プロジェクトおよび遺跡発掘において、調査終了後においても発掘報告書が編集・出版されていない（張 2011:13）。この理由は、出土した遺物資料の整理が十分に進められていないためであるとされている。また、王先勝の「中国考古学的現状 任務及未来趨勢：古代紋飾与古代研究新趨勢」によると、これまで資料整理が未完であるために発掘報告書が公開されていない調査プロジェクトおよび遺跡発掘が、1万件以上存在する（王 2019:130-141）。中国考古学におけるこれらの問題点について、考古学者の李済は、まず、1960年以前の報告書には、発掘場所、発掘状況、寸法、材質などの具体的なデータが記されておらず、それらの多くは学術的な研究と言えるものではないと述べたうえ（徐 2005:131-132）、1963年の半坂遺跡の発掘報告以後には、改革開放後の大規模発掘調査などを挟んで、状況は少しずつ改善しているものの、多数の出土遺物が、現在に至るまで発掘報告書が公開されずに滞積している状況であると述べている（徐 2005:132）。考古資料を扱うにあたっての以上のような制約があるために、本稿で取り上げた出土遺物において、明確なデータが得られていない例が多くあることをまず指摘しておく。

3. 漢代における拍手の俑

本稿で取り上げる遺物の主たるものは、拍手する姿を造形した「俑」である。中国では、特に高位者や富裕層が埋葬される場合、大墓を建てるだけでなく、生前に好まれた品々や貴重品、死者のために制作された器物が副葬品として埋葬されることがある。これらの特別な器物は明器と呼ばれる。明器は車、家具、家屋、家禽類などを造形したものが多いが、人間を造形した明器が「俑」である。俑には木製、玉製、石製、銀や銅などの金属製がある。その製作技術や表現方法は、時代や出土地域により異なるが、俑の中には、音

楽を演奏する姿を造形した「楽俑」が存在する。楽俑の多くは楽器を演奏する姿が造形されているが、掌を拍っているように見える俑も少数ながら見出すことができる。それらの関連資料には、以後本稿で述べるように「拍手俑」と記されている例がある。しかし、これまで拍手俑そのものに焦点を当てた先行研究はみられない。本稿では、拍手俑を中心に検討していくが、俑以外の考古資料についても論じている。

4. 本稿の記述方法

筆者は、戦国（前 475-前 221）から漢代（前 206-後 220）を中心とする考古遺物を対象に、拍手を造形あるいは描いたと考えられる遺物を限なく調査した。調査した資料は、CNKI（China National Knowledge Infrastructure）、WANFANG DATA（万方データベース）、BAIDU（百度文庫）、SINA（新浪新聞）、DOC88（道客巴巴）等のデータベース、遺物に関する発掘報告書、研究論文、雑誌記事、考古学の専門書である。この他、河南省、浙江省、山西省、四川省、安徽省、陝西省、雲南省の博物館のウェブサイト、博物館の研究者へのインタビューも調査の手がかりにした。この結果、現在までに、拍手の姿に類似する遺物を49例確認した。しかし、それらは拍手に類似する遺物とまでは言うことができるとしても、実際に手を拍つ姿が造形されているのかについて判断するには困難を伴う。その理由は、拍手の姿に類似する遺物には、手を前に出している、物を持っている姿勢と区別が付きにくい例があり、また、手を合わせていると考えられても、拍手であるのか合掌であるのか判断しづらい例が多いからである。両掌を合わせるという姿勢は、拍手に、物を持つ姿勢の他に、合掌や拱手と解釈する可能性を含み持たせてしまう。さらに、両掌を拍っていると判断されても、手拍子として拍つか拍手として拍つかの見極めは困難である。本稿で以下に提示する49例には、拍手である可能性が高いものから低いものまでがある（表1*2）。

本稿では、まず、合掌や拱手との区別については検討から外し、この49例における、拍手する遺物である可能性の度合いについて、極めて高い、高い、ある程度、低い、この4つの分類基準で判断した。この基準に基づいて対象とする49例を分類した。分類に際しては、筆者の主観を減らし、報告書の有無やその内容を重視することに努めた。

判断基準について説明する。遺物に関する関連資料として、発掘報告書を2点、研究論文、雑誌記事、博物館における判断、筆者2人の判断をそれぞれ1点とし、合わせて4点以上で拍手と判断されている遺物であれば、「拍手である可能性が極めて高い」と判断した。次に、合わせて3点以上で拍手と判断されている遺物であれば、「拍手である可能性が高い」と判断し

た。次に、発掘報告書に拍手と記されておらず、関連資料 1 点のみに拍手と記されており、且つ筆者も拍手の可能性があると判断した遺物であれば、「拍手である可能性がある」と判断した。また、関連資料に拍手と記されておらず、写真のみから拍手の可能性を指摘できる遺物についても、「拍手である可能性がある」

に含めた。得点は低くても、筆者による 2019 年の現地調査などの判断により、拍手である可能性を高く評価した例があることを付記しておく。この他、「拍手であるとする言説があるが、写真で確認できない遺物」についても記した。なお、本稿では、関連資料に「拍手俑」と記されている場合にはそのまま「拍手俑」の

表 1 中国の考古資料にみられる拍手

番号	名称	発掘地	時代	手の位置	両掌の形	両手間の距離	両掌の関係	両掌の向き	姿勢	性別	表情	遺物の評価	拍手の可能性	備考
5.1.1	西漢複釉陶坐俑-1	河南济源	前漢	胸先離	標準	離	左右対称	相对	正座	女性	不明	論=3、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.1	西漢複釉陶坐俑-2	河南济源	前漢	胸先離	標準	離	左右対称	相对	正座	女性	不明	論=3、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.2	漢復釉陶婦人俑	河南济源	漢代	胸先離	標準	離	左右対称	上開	正座	女性	不明	報=2、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.2	漢復釉陶拍手俑	河南济源	前漢	胸先離	標準	離	左右対称	上開	正座	不明	不明	報=2、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.3	西漢趙氏孤兒図	洛陽	前漢	胸先離	不明	離	上下	相对	直立	男性	笑い	記=1、筆=2	極めて高い	評価の特例
5.1.4	紅釉舞楽俑群	河南济源	後漢	胸先離	標準	離	左右対称	上開	正座	男性	笑い	報=2、論=1、筆=2	極めて高い	
5.1.5	洛寧東漢陶俑群	河南洛寧	後漢	胸先近	交差	近	右上左下	相对	膝立	男性	笑い	報=2、筆=2	極めて高い	
5.1.6	北魏彩繪雜技胡俑	大同雁北	北魏	顔先	不明	離	左右対称	相对	直立	男性	笑い	論=1、記=1、筆=2	極めて高い	
5.1.7	西漢擊掌緑褐釉陶俑/ 西漢擊掌褐釉陶俑	不明	前漢	胸先離	緑不明/ 標準	離	左右対称	相对	正座	女性	不明	論=1、博=1、筆=2	極めて高い	緑は左手欠
5.1.8	仙人六博図石函	四川新津	不明	頭上	不明	離	不明	外開	正座	不明	不明		極めて高い	
5.1.8	東漢緑釉六博俑	河南雲宝	後漢	顔先離	標準	離	左右対称	相对	膝立	男性	不明	記=4、博=1、筆=2	極めて高い	
5.1.8	東漢六博俑	不明	後漢	胸先離	交差	近	右下左上	右上左前	胡座	不明	笑い		極めて高い	右水平左垂直
5.1.9	彩繪陶楽舞俑	不明	不明	胸先離	標準	離	左右対称	外開	正座	女性	不明	記=1、筆=2	極めて高い	評価の特例
5.1.10	濟源東街明代壁画	濟源東街	明代	胸先離	標準	合	左右対称	相对	直立	女性	なし	報=2、筆=2	極めて高い	
5.2.1	西漢複釉陶打拍俑	河南济源	前漢	顔先離	標準	離	左右対称	内開	直立	女性	不明	論=1、博=1、筆=1	高い	
5.2.2	彩繪百戯陶俑	洛陽	後漢	胸先離	交差	離	左上右下	外開	正座	不明	不明	記=1、筆=2	高い	
5.2.3	陶舞楽雑技俑	濟源泗澗沟	後漢	胸先離	標準	離	左右対称	相对	正座	不明	不明	論=2、筆=1	高い	
5.2.4	將軍俑と拍手俑	四川自貢	不明	胸先近	標準	離	左右対称	相对	直立	女性	なし	記=1、筆=2	高い	
5.2.5	北齊黄釉磁扁壺	河南安陽	北齊	顔先離	標準	離	左右対称	外開	直立	女性	なし	論=1、筆=2	高い	
5.2.6	東漢婺州窯青瓷堆塑罐	浙江武義	後漢	胸先離	標準引き	合	左右対称	相对	不明	男性	笑い	筆=2	高い	評価の特例
5.2.7	婺州窑青釉堆塑人物罐	浙江武義	三国(呉)	胸先離	標準引き	合	左右対称	相对	不明	男性	笑い	論=1、筆=2	高い	
5.2.8	宴飲奏楽画像碑	河南新野	後漢	胸先	標準	離	左右対称	相对	正座	女性	不明	博=1、筆=2	高い	
5.2.9	漢代画像石祠	安徽淮北	漢	胸先離	不明	離	不明	不明	正座	男性	不明	報=2、筆=1	高い	
5.2.10	宴楽図	陝西靖辺	後漢	胸先	標準	離	左右対称	不明	正座	女性	不明	報=2、筆=1	高い	
5.3.1.1	陶舞俑与陶楽俑	広東広州	後漢	胸先	標準	離	左右対称	相对	座	女性	なし	博=1、筆=1	ある	
5.3.1.2	四人楽舞銅飾牌	雲南晋寧	漢	胸先離	不明	離	左右対称	外開	直立	女性	笑い	論=1、筆=1	ある	
5.3.1.3	漢画像石	不明	漢	胸先	不明	不明	不明	不明	正座	男性	不明	記=1、筆=1	ある	
5.3.1.4	敦煌壁画254窟	敦煌	北魏	首先近	標準	近	左右対称	相对	不明	不明	笑い	記=1、筆=1	ある	
5.3.1.5	奏楽舞蹈図	陝西西安	北周	胸先	不明	不明	不明	不明	不明	男性	なし		ある	片手のみ
5.3.1.5	奏楽宴飲舞踏図	陝西西安	北周	胸先	不明	不明	不明	不明	直立	男性	なし	論=2	ある	
5.3.1.6	拍手高歌女坐俑	陝西西安	北朝	顔先近	標準	離	左右対称	相对	正座	女性	なし	報=2	ある	
5.3.1.7	彩繪陶院落	河南淮陽	後漢	胸先近	交差	近	左下右上	相对	正座	男性	なし	報=1、筆=1	ある	
5.3.1.8	銅鼓残片笙歌紋飾	雲南晋寧	漢	胸先離	不明	離	左右対称	外開	直立	女性	笑い	論=1、筆=1	ある	
5.3.1.9	戦国水陸攻戦紋銅壺	四川成都	戦国	胸先離	不明	離	左右対称	相对	直立	女性	不明	記=1、筆=1	ある	両腕を前方に伸ばす
5.3.1.10	司馬金龍墓女楽俑	山西大同	北魏	胸先近	交差?	離	左下右上	不明	正座	女性	笑い	論=1、筆=1	ある	左手欠
5.3.2.1	七槃舞(煉瓦画像)	山東沂南	後漢	首先離	不明	離	左右対称	不明	直立	不明	不明	論=1、筆=1	ある	
5.3.2.2	楽舞飲茶画像	河南南陽	後漢	胸先	不明	不明	不明	不明	正座	男性	不明	記=1	ある	
5.3.2.3	楽舞図(漢画像石)	浙江徐州	後漢	不明	不明	不明	不明	不明	座	不明	不明	記=1	ある	
5.3.2.4	北壁二原石	山東微山	漢	胸先	不明	離	不明	不明	座	不明	不明	論=1	ある	
5.3.2.5	甘肅酒泉丁家閭墓室壁画	甘肅酒泉	晋十六国	胸先	不明	不明	不明	不明	座	女性	不明	論=1	ある	
5.3.2.6	西安北周涼州薩保史君墓「北壁浮彫」	陝西西安	北周	胸先	不明	離	不明	相对	直立	不明	不明	報=2	ある	
5.3.2.7	宴飲百劇図「打虎亭」	河南新密	漢	不明	不明	不明	不明	不明	正座	男性	不明	論=1	ある	
5.3.2.8	撫琴・長袖・出喪	江蘇徐州	漢	不明	不明	不明	不明	不明	座	女性	不明	記=1	ある	
5.3.2.9	彩繪陶舞踏俑	河南济源	後漢	頭上	標準	離	不明	外開	直立	男性	笑い	論=2	ある	
5.3.2.10	彩繪百戯楽舞陶俑群	河南	漢	胸先離	標準	離	左右対称	相对	正座	不明	不明	論=1、筆=1	ある	
5.3.2.11	対牛弹琴図	不明	後漢172年	胸先	不明	不明	不明	不明	座	牛	不明	(記=1)、筆=1	ある	
5.3.2.12	孔子拜老聃図	江蘇徐州	漢	胸先	不明	不明	不明	不明	直立	不明	不明	博=1、筆=1	ある	
5.4.1	南陽七里園鐘鼓管弦楽団画像石	河南南陽	後漢	不明	不明	不明	不明	不明	正座	不明	不明		不明	
5.4.2	新野樊集擊鼓歌唱画像碑	新野樊集	前漢	不明	不明	不明	不明	不明	直立	不明	不明		不明	

呼称を用いて論じているが、本稿における「拍手俑」は、あくまで「拍手しているように見える俑」、「拍手が造形されている可能性がある俑」の意味である。

5. 調査した拍手関連資料

5.1 拍手である可能性が極めて高い遺物

5.1.1 「西漢複釉陶坐俑」2 体（現地調査済）

2003 年に河南省済源市の文物部門は沁北電工場の建設に協力するため、西窯頭村の漢墓群の発掘調査を緊急に行った。この M10 墓から前漢末期（前 206-後 8）の「歌舞伎楽俑群」6 体が出土したが、その中の 2 体「西漢複釉陶坐俑-1」「西漢複釉陶坐俑-2」は拍手を造形している可能性があると考えられている。「西漢複釉陶坐俑-1」は、横幅 8.2cm、前後の幅 8.7cm、高さ 15cm である。「西漢複釉陶坐俑-2」もほぼ同じで、頭部に少し歪みがある。これらの俑は、済源博物館が「歌舞伎楽舞群」と名付けた俑群の一部であるが^{*3}、その他の、吹簫俑、吹笛俑、舞女俑、弹琴俑とともに、現在は済源博物館に保管されている。「西漢複釉陶坐俑」の 2 体について、同博物館館長の胡成芳は、『泥土之魂：済源漢代陶器』（胡 2015:102）で、俑の胴体は緑色、正座姿、表情が自然で高い三角形の帽子を被っているとのみ紹介するにとどめ、拍手の造形の有無については言及していない。しかし、この 2 体については、複数の文献で拍手を造形した俑であると言及されている。李彩霞の「済源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」（李 2010:101-104）、李晓音の「済源出土漢代陶俑的美感表現」（李 2015:53-56）、及び劉恵「済源出土的漢代舞樂俑浅析」（劉 2017:8-12）は、これらの 2 体が両手を胸先に上げ、平行に向け、音楽に合わせて手を拍っていると記している。俑を見ると、両手を、肘を曲げた状態で胸先の高さに水平に出している。両腕の幅は、肩幅とほぼ同じで、親指は他の 4 本の指と分かれている。現在における通常の拍手と同じ姿勢でもあり、拍手が造形されている可能性が極めて高いと考



図 1.1 西漢複釉陶坐俑-1
「済源博物館」



図 1.2 西漢複釉陶坐俑-2
「済源博物館」

えられる。一方、「済源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」（李 2010:101-104）「済源出土漢代陶俑的美感表現」（李 2015:53-56）、には、6 体の俑は一組であると指摘されている。「西漢複釉陶坐俑」2 体は、楽器と舞手の俑と一組の俑であるため、拍手が造形されているとすれば、演奏の一部としての手拍子が造形された俑である可能性があると考えられる。

5.1.2 「漢復釉陶婦人俑」及び「漢復釉陶拍手俑」（現地調査済）

1991 年に河南省済源市の桐花溝十号漢墓に出土した漢代（前 206-後 220）における「漢復釉陶婦人俑」で、貴族の婦人が造形された俑である。現在の保管場所は不明である。『考古』2000 年第二期に掲載された発掘報告書「河南済源市桐花溝十号漢墓」（河南文物考古研究所:78-88）には、「漢復釉陶婦人俑」として、「俑の上に赤い垂胡短衣を着て、腰に黒い帯を締め、下に白いロングスカートを穿き、全体的に造型と装飾が典雅である」と記されている。同じ漢墓から発掘された、舞俑 1 体、演奏俑 3 体、歌手俑 1 体、童僕俑 1 体と合わせて 7 体一組の俑群を成すものであるが、楽器や舞手の俑と一体の俑であるため、手を拍つ姿を造形した俑である可能性が極めて高いと考えられる。また、「漢復釉陶婦人俑」は、演奏に関わらない童僕を造形した童僕俑と発掘位置が近接しているため、演奏の一部としての手拍子である他に、称賛のために拍手している可能性も考えられる。



図 1.3 漢復釉陶婦人俑『河南済源市桐花溝十号漢墓』2000

「漢復釉陶婦人俑」とほぼ同じ形状の俑が、2009 年 3 月 30 日に河南省済源市の天壇柴庄 M9 で出土した「漢復釉陶拍手俑」である。済源博物館の展示におけるキャプションに^{*4}、「漢復釉陶拍手俑」と明記されている。横幅 10cm、前後の幅 10.1cm、高さ 10.9cm、正座し、両手を胸に構え、掌を向き合わせ、四本の指を揃えて拍手している。



図 1.4 漢復釉陶拍手俑
「済源博物館」

「漢復釉陶拍手俑」には発掘報告書が見つからないが、年代も造形も「漢復釉陶婦人俑」と同じと言ってよく、拍手が造形されている可能性が極めて高いと考えられる。

5.1.3 「西漢趙氏孤児図」

河南省洛陽王城公園で出土した「西漢趙氏孤児図」であり、発掘時期は不明。写真は「趙氏孤児図」の一部分である。拍手しながら笑っている老人が描かれているが、画面全体には4人が配置されている。『史記』の「趙氏孤児」によると、老人は医者韓厥であり、趙氏孤児の趙武に向けて手を拍っている。老人の表情は複雑である。BAIDU（百度文庫）^{*5}には、現物の図は、縦25cm、横194cmとあるが、現物の所在が不明であり、関連資料もBAIDUの他には見出だすことができない。成立時期も明確でなく捏造されたものである可能性もないわけではないが、拍手する人物が特に精細に描き出された資料であるため、可能性が極めて高いに含めた。

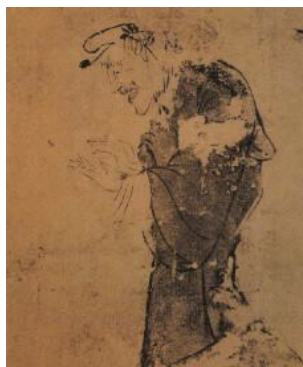


図1.5 西漢趙氏孤児図『BAIDU』

5.1.4 「紅釉舞樂俑群」（現地調査済）

1969年11月に河南省済源泗潤溝M8墓で出土した東漢の百戯場面を描いた「紅釉舞樂俑群」の1体であり、現在は河南博物館に保管されている。「済源泗潤溝三座漢墓の発掘簡報」には、吹奏樂俑3体、拍手俑1体、指揮俑1体、舞俑2体、雜技俑1体の、7体一組で出土とあるが（河南省博物院1973:50）、5体のみ公開されている。



図1.6 紅釉舞樂俑群『済源出土の漢代舞樂俑浅析』2017

高さは、21.5cmから17.5cmまでであるが、すべて紅陶で、正座している。右から2体目の俑が、口を開けて笑い、両手を上げ、掌を合わせ、拍手しているように見える。2017年12月の済源職業技術学院学報に掲載された「済源出土の漢代舞樂俑浅析」（劉2017:11）及び「済源泗潤溝三座漢墓の発掘簡報」（河南省博物院1973:52）には、俑の1体は手拍子として手を拍っていると記されている。

5.1.5 「洛寧東漢陶俑群」（現地調査済）

1980年に河南省洛寧県の黄溝湾村に出土した後漢時代中後期における雜技を描いた「洛寧東漢陶俑群」の1

体である。すでに筆者の1人により言及されているが、同地で発見された3体のうちの1体であり、現在は公開されていない（矢向2021:29）。1987年1月の「河南洛寧東漢墓清理簡報」（張1987:39）には、高さ12cmの鼻の高い人物が、跪坐し、尖った帽子を被り、前を向いて拍手している姿であると記されている。5.2.2の「彩繪百戯陶俑」の拍手俑と同様の両掌を開いた交差拍ちであり、現代でもよく見られる拍ち方である。「彩繪百戯陶俑」の俑との違いは、この俑が上腕をあげて拍つ姿勢であることである。

5.1.6 「北魏彩繪雜技胡俑」

2013年に山西省大同市の曹夫楼村に出土した北魏時代（386-534）の雜技を描いた「北魏彩繪雜技胡俑」の1体であり、現在は山西省博物館に保管されている（矢向2021:29）。「大同雁北師院北魏墓群」には、演技する中央の人物を6人が取り囲み、樂器を演奏していると記されている（劉2008:53-55）が、2013年7月7日に雑誌「SHANXIYOUTH」に掲載された記事には、この6名は、拍手喝采していると記されており（2013:8）、BAIDU^{*6}にも同様の記述が見られる。それぞれの俑の形状から前者が正しいと考えられるが、6体の俑のうち、右から2体目の俑は、この姿勢に対応する樂器を想定できず、手を拍っていると考えられる。左から2体目が、口を開いており、声を掛けていると考えられることから、右から2体目が手を拍っているとする判断は妥当と考えられる。

5.1.7 「西漢擊掌綠褐釉陶俑」及び「西漢擊掌褐釉陶俑」

2018年第2期『理財・收藏版』に掲載された吳艷麗の「許昌博物館藏百戯俑賞析」によると、現在、許昌博物館に前漢の拍手俑が2体保存され



図1.7 西漢擊掌綠褐釉陶俑(左) 西漢擊掌褐釉陶俑(右)『許昌博物館藏百戯俑賞析』2018

ている。発掘時期、発掘場所は不明であるが、舞俑3体、吹奏俑3体、俳優俑2体、拍手俑2体の10体一組における2体であり、ともに、横幅8cm、前後の幅9cm、高さ11.5cmである。吳は、「西漢擊掌綠褐釉陶俑」は婦人、「西漢擊掌褐釉陶俑」は少女であるが、ともに樂舞を見ながら拍手喝采していると述べている（吳2018:38-42）。筆者の検討では、2体はともに座しているが、



図1.8 拍手俑「許昌博物館」

服、帽子、胴の色がそれぞれ異なることから、2 体とも手拍子、1 体が手拍子でもう 1 体が称赞の拍手、2 体とも拍手、以上のどの可能性もあると考えられる。「西漢擊掌緑褐釉陶俑」は、手先を丸めているように見える。なお、許昌博物館ホームページ^{*7}には、上記 2 体以外にも高い帽子を被り手を拍っているように見える 1 体の拍手俑が確認できる。同じく前漢の俑であり、横幅 7cm、前後の幅 6.5cm、高さ 14.5cm、展示のキャプションには拍手俑とあるが、左手首が欠けており、手を拍っている可能性がないわけではないが、不明な点が多い。

5.1.8 「仙人六博図石函」及び「六博俑」2 体

1950 年に四川省新津県老君山崖墓で出土した後漢（25-220）における「六博」の対局を描いた壁画「仙人六博図石函」であり、現在は四川博物館に保管されている^{*8}。仙人 2 人による六博の対局場面が描かれているが、勝者は両手を高く上げ、喜んで手を拍とうと

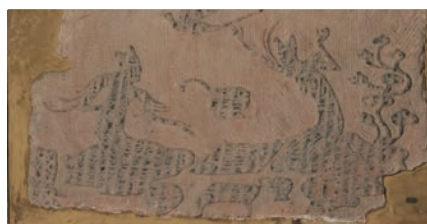


図 1.9 仙人六博図石函「四川博物館」

しているように見える。勝者は拍手でなく「万歳」をして喜んでいるようにも見えなくはないが、図は拍手をしていると判断した。その理由は、「六博」対局における拍手を造形している次の俑 2 体が存在することによる。

図 1.10 は、1972 年に河南省靈宝県で発掘された「東漢緑釉六博俑」である。現在の保管場所は不明であるが、六博の対局を描いた人物が造形されている。『文物』に掲載された発掘報告書「靈宝張湾漢墓」（楊・張・趙 1975：80）には、2 人が対局しているとのみ記載されているが、写真を見ると、右側の人物の手の位置は顔の前にあるため、「万歳」の可能性は考えられず、拍手の可能性の極めて高い。



図 1.10 東漢緑釉六博俑『靈宝張湾漢墓』（楊・張・趙 1975：80）

図 1.11 は大英博物館が収蔵している「東漢六博俑」である。左の人物は高さ 19cm、横幅 13.5cm、前後の幅 11cm、右の人物は高さ 19cm、横幅 15.5cm である。2 体は向き合って座り、右の人物は両



図 1.11 東漢六博俑『澎湃新聞』2017

手を胸先まで上げ、左手を上、右手を下にしている。両掌を向き合わせて拍手しているように見える。もう 1 体は両手を顔前に挙げ、掌を内側に向けている。「大英博物館展覧漢代六博俑及其背後的生死觀念」（澎湃新聞 2017）などこれらの遺物の関連論文に拍手と明記されているものはないが、新聞および雑誌記事である遊曉鵬「踏着伝説尋踪六博」（遊 2015）、王惟一「失伝の六博遊戲」（王 2018）、博古格物「什麼是六博」（博古格物 2019）には拍手であると明記されている。以上から、図 1.9 の勝者は拍手しているとする解釈が妥当であると考えられる。

5.1.9 「彩絵陶樂舞俑」

ニューヨークのメトロポリタン美術館に保管されている漢代の「彩絵陶樂舞俑」である。発掘時期、発掘



図 1.12 彩絵陶樂舞俑『中国芸術品収蔵』2018

場所などは不明である。2018 年 8 月 22 日の SINA 新聞「漢《彩絵陶樂舞俑》」には、1 体が踊り、1 体が箏を弾き、1 体が拍手していると記されている（中国芸術品収蔵 2018）^{*9}。高さ 13.3-3.7 cm、横幅 10.8-13.3 cm、前後の幅 5.7 cm、「七盤舞」の場面が表現されている。5.1.2 の「漢復釉陶婦人俑」に類似している俑であるため、可能性が極めて高いに含めた。

5.1.10 「済源東街明代壁画」（現地調査済）

2012 年 1 月に河南省済源市東街明代壁画墓で出土した明代（1368-1644）の壁画「済源東街明代壁画」における西壁の二番目に、拍手する女官が描かれている。「済源東街明代壁画」は済源博物館に保管されている。この女官は右側の笙を吹いている女官を見ながら、両掌を胸先に上げ、拍手している。「済源市東街明代壁画墓発掘簡報」



図 1.13 済源東街明代壁画『済源市東街明代壁画墓発掘簡報』2013

（済源市文物工作隊 2013：10-16）は、手拍子としての拍手が造形されていると記している。

5.2 拍手である可能性が高い遺物

5.2.1 「西漢複釉陶打拍俑」（現地調査済）

2003 年 5 月 5 日に河南省済源市沁北電工場 M10 墓で出土した前漢（前 206-後 8）の「西漢複釉陶打拍俑」であり、現在は済源博物館に保管されている^{*10}。帽子をかぶり、ロングスカートを穿き、両腕を上方に伸ばし、舞いながら拍手しているように見える。先述した「済源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」には、手を拍つ舞踊が造形されている可能性があると記されている（李 2010:101-104）。済源市博物館の展示のキャプションには、手拍子であると記されている。

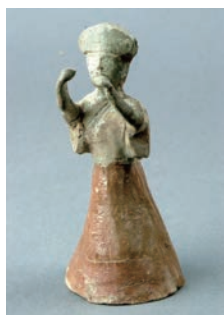


図2.1 西漢複釉陶打拍俑「済源博物館」

5.2.2 「彩絵百戯陶俑」（現地調査済）

河南省洛陽市洛陽漢墓で出土した後漢の「彩絵百戯陶俑」の 1 体であり、現在は洛陽博物館に保管されている。

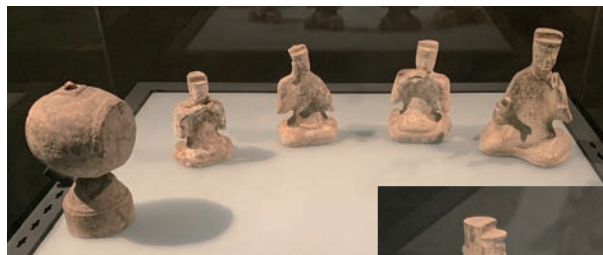


図2.2 彩絵百戯陶俑「洛陽博物館」

2019 年 8 月に現地調査を行ったときには、4 体が展示されていたが、本来は 7 体一組である。報告書が未刊行であり不明な点が多いが、拍手を造形した右端の俑は、他の 6 体より明らかに大きく、角度を変えた写真で見ると、左手を上から右手を下から拍つ構えであることがわかる。なお、右 3 体目の首を傾げ右手を耳近くに当てている俑は、観客である可能性もあるが、『南陽漢代画像石』（南陽漢代画像石編集委員会 1985）などを参照すると、歌手の造形であるとも考えられる。これらを考慮すると、右端の俑は、手拍子でリズムをとる、もしくは観客による拍手の両方の可能性がある。

5.2.3 「陶舞樂雜技俑」

1969 年に河南省済源市泗澗溝の M24 墓で出土した前漢の「陶舞樂雜技俑」であり、現在は公開されていない。雑技俑 1 体、舞俑 2 体、拍手俑 2 体の、5 体一組で、漢代の曲芸の場面を描いている。先述の「済源出土的漢代舞樂俑浅析」（劉恵 2017:10）及び「済源泗澗溝三座漢墓の発掘簡報」（河南省博物院 1973:52）には、左 2 体目の俑は、音楽に合わせた拍手が造形されていると

記されている。拍手であるとすれば、リズムを刻む手拍子と解釈することもできるが、この俑群には、楽器を持っている演奏俑が見られないので、称賛の拍手が造形されている可能性も考えておきたい。なお、拍手俑を伴う俑群において演奏俑が見られない俑群は他に見つかっていない。



図2.4 陶舞樂雜技俑『済源泗澗溝三座漢墓の発掘簡報』1973

5.2.4 將軍俑墓の俑

本稿で取り上げる拍手遺物のほとんどは、演奏の一部として手拍子でリズムをとるか、もしくは観客として賞賛する拍手であるが、この將軍俑は、礼敬として手が拍たれている可能性がある遺物である。2018 年に四川省自貢市富順県富世鎮北湖公園の工事現場に発掘された將軍俑墓で複数の俑が発見された（矢向 2021: 30）。同年 7 月 24 日の搜狐新聞には、鎮墓將軍俑 1 体（高さ 104cm）、双頭俑 1 体（横幅 34cm）、立俑、拍手俑、侍女俑 17 体（高さ 26-42cm）、欠損した立俑 11 体（21-30cm）が記されている（富 2018）。2021 年 10 月現在、報告書が未刊行であるため、時代等の詳細は不明であるが、漢代から唐代に至る時期に造形されたと考えられる釉陶の俑である。右から 3 体目の侍女俑は、両掌を胸の位置で開いている。両腕の幅は肩幅よりやや狭く、物を持っている可能性はあるが、手を拍っているように見える。周囲の侍女俑は、両手を胸前で組み合わせる拱手俑であり、奏樂や舞踊の俑が見られないため、侍女俑が拍手俑であるとすれば、歌舞に伴う拍手ではなく、礼敬として両掌を当てる瞬間が造形されている可能性が高いと考えられる。

5.2.5 「北齊黄釉磁扁壺」（現地調査済）

1971 年に河南省安陽市範粹墓で出土した北齊（550-577）の「黄釉磁扁壺」は、現在は河南博物館に保管されている。壺の紋様に 5 人が描かれているが、中央の男は踊り、両側の 4 人はそれぞれ楽器を持ち演奏している。右から 2 番目の人物は拍手しているように見える。この人物は指先を開いているが、楽器を持つのであれば指先を閉じると考えられるからである。2006 年の『带你走進博物館：河南省博物館』（河南博物館 2006）には、手拍子とし



図2.5 北齊黄釉磁扁壺『带你走進博物館：河南省博物館』2006

ての拍手が描き出されていると記されている。

5.2.6 「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」(現地調査済)

1973 年 8 月に浙江省武義県で出土した後漢(25-220)の「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」である。この堆塑罐は、高さ 41.5cm、口の直径 2.5cm、腹の直径 23.5cm であり、現在は浙江博物館に保管されている。罐上部では、中央の大きな人物を囲んで 4 人がそれぞれ楽器を演奏している。下部では、中央の倒立芸をしている人物に対し、両側の 2 人が正座して掌を合わせ拍手をしているように見える。浙江博物館の展示のキャプションには、両側の 2 人は観客であるとのみ記されている。興味深い堆塑罐であるが、そもそも人物が造形されている堆塑罐の研究を見つけないことができない。



図 2.6 東漢婺州窯青瓷堆塑罐「浙江博物館」

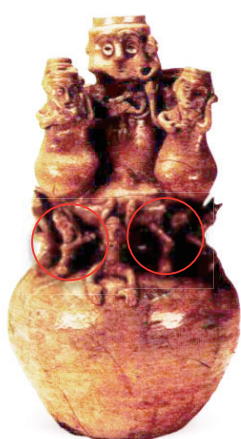


図 2.7 婺州窯青釉堆塑人物罐『漢晋時期浙江青瓷堆塑谷倉罐』2012

5.2.7 「婺州窯青釉堆塑人物罐」

1973 年 8 月に浙江省武義県桐琴果園三国墓で出土した三国時代(220-280)の「婺州窯青釉堆塑人物罐」である。発掘場所、及び造形内容は上記の「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」とおおよそ一致する。現在の保管場所は不明であるが、2012 年の「漢晋時期浙江青瓷堆塑谷倉罐」(蔣・徐・朱 2012:50-52)には、「拍手」が造形されていると記されており、観客の拍手と演奏者の手拍子の両方の可能性があると述べられている。しかし、「東漢婺州窯青瓷堆塑罐」の展示キャプションに観客であるとのみ記されていることを考慮すると、演奏家の手拍子である可能性は低いと考えられる。

5.2.8 「宴飲奏楽画像磚」

河南省新野県に出土した後漢(25-220)の画像石「宴飲奏楽画像磚」であり、横幅 38cm、高さ 40cm、現在は河南博物館に保管されている。両側の 2 人が楽器を演奏しており、中央の人は拍手しているように見



図 2.8 宴飲奏楽画像磚「河南博物館」

える。3 人の位置関係から、中央の人は手拍子を取り指揮者の役割を果たしている可能性があると考えられる。3 人の前に机と酒杯が置かれており、貴族の宴会の場面と考えられる。

5.2.9 「漢代画像石祠」

2019 年 1 月に安徽省淮北市で発掘された漢代(前 206-後 220)の祠の右側壁石に、拍手する人が描かれている壁画がある。「安徽省淮北市発見漢代画像石祠」(淮北市文物局 2019:19-25)によると、この壁石は、楼閣、六博、曲芸を描いたものであり、閣内で 2 人が六博を対局し、楼の外で弄丸(お手玉)を演じている



図 2.9 漢代画像石祠『安徽省淮北市発見漢代画像石祠』2019

場面を描いており、左側の 2 人がそれに向けて手を拍っている。画面に、楽器を持っている人物は見られないので、手を拍っているとすれば、観客として、称賛の拍手を送っている可能性があると考えられる。

5.2.10 「宴楽図」

2017 年の「陝西靖辺県楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓発掘簡報」に、2015 年に陝西靖辺県で発掘された東漢壁画墓の壁画「宴楽図」の中に拍手が描かれていると報告されている(陝西省考古研究院靖辺県文物管理弁公室



図 2.10 宴楽図『陝西靖辺県楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓発掘簡報』2017

2017:3-26)。画面には、庭で 1 人の女性が舞い、右と左に 3 人ずつの客が座している情景が描かれている。発掘簡報には、右 3 人は称賛の拍手が描かれていると記している。右 3 人のうち左側の人物は見にくいですが、右側 2 人の袖の形と位置から判断すると、手を胸の高さで、肩幅とほぼ同じ幅に保ち、両掌を開こうとする瞬間が描かれている可能性を指摘することができる。

5.3 拍手である可能性のある遺物

5.3.1 写真から拍手の可能性を指摘できる遺物

資料と写真から拍手の可能性を指摘できる遺物、及

び写真のみから拍手の可能性を指摘できる遺物の例を述べる。

5.3.1.1「陶舞俑与陶樂俑」

1955 年に広東省広州市先烈路で出土した後漢（25-220）の舞樂場面を描いた「陶舞俑与陶樂俑」であり、現在は広州博物館に保管されている。同地からは楽器

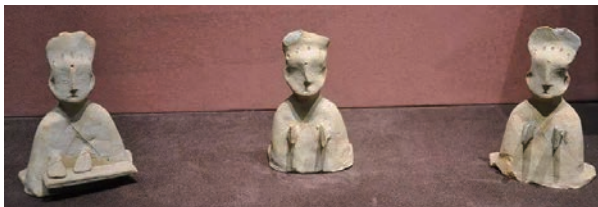


図3.1 陶舞俑与陶樂俑「広州博物館」

を弾いている俑 1 体、拍手俑 2 体、舞俑 1 体の 4 体一組が発掘された。舞俑は写真にないが、他の 3 体より 2-3 倍大きい。広州博物館の展示のキャプション^{*11}には、手を拍つ 2 体の陶樂俑は、舞に対して手拍子として拍手していると記されている。両手の位置から楽器や物を持っている可能性もないではないが、俑の配置から拍手の可能性があると考えられる。

5.3.1.2「四人樂舞銅飾牌」

1956 年に雲南省晋寧石寨山で出土した漢代の笙歌の場面を描いた「四人樂舞銅飾牌」であり、現在の保管場所は不明である。4 人のうち、1 人が瓢箪のような楽器を演奏し、3 人が拍手しながら歌っているように見える。陳萬竊の「試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史 7: 討論漢代打擊奏樂器与西南夷民族樂器」（陳 1998:18）には、「発掘報告書に、音楽に合わせて、拍手していると明記されている」と書かれている。しかし、発掘報告書は現時点で未公開であり確認できない。3 人は拍手するために手を広げていると考えられないことはないが、舞踊の動作として手を広げているとも考えられる。



図3.2 四人樂舞銅飾牌-1
『試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史』1998



図3.3 四人樂舞銅飾牌-2
『試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史』1998

5.3.1.3「漢画像石」

この画像は、年代、発掘時期、発掘場所、名称、現在の保管場所などが不明であり、関連資料も見つからないので、ここでは「漢画像石」と仮称する。SINA のブログ記事「図説漢朝の漢画像石-漢朝の戲劇院和游乐场」（2013）^{*12}によると、画像は漢代の劇場と娯楽活動を描いたものであり、上段に曲芸の様子が描かれ、左に 10 人、右に 2 人の観客がいる。同記事には、音楽、



図3.4 漢画像石『図説漢朝の漢画像石-漢朝の戲劇院和游乐场』2013

舞踊、スポーツ、演劇（東海黄公劇など）を一体化した演出が漢代に流行していたとある。描かれた 12 人は、楽器を持ってはいないが、手を拍っているのかも判別できない。描かれている位置から、観客の可能性は高いと考えられる。手の形状は確認できないが、手の位置が胸先近くであるので、拍手である可能性もないとは言えない。

5.3.1.4「敦煌壁画 254 窟」

甘肅省敦煌市の東南 25km に位置する鳴沙山の東の断崖に南北に 1,600m に渡り掘られた莫高窟がある。その壁面には一面に壁画が描かれ、敦煌壁画と呼ばれる。その 254 窟にある「尸毘王本生故事画（割肉救鳩）」



図3.5 敦煌壁画254窟尸毘王本生故事画（割肉救鳩）

「尸毘王本生故事画」に、「割肉救鳩」の故事を描いた北魏時代の仏教壁画がある^{*13}。画面を見ると、左下の 3 人のうち、1 人は尸毘王の膝を優しく抱え、1 人は背を向け話しているが、左端の 1 人は、顔を尸毘王に向け、手首を狭め、手先を上方に向け広げている。拍手しているようにも見える。この壁画は尸毘王の病氣治癒の喜びを表現するものであると考えられるため、もし拍手であるとすれば、喜びの拍手が造形されていると考えられる。

5.3.1.5「奏樂舞蹈図」及び「奏樂宴飲舞蹈図」

2000 年 5 月に陝西省西安市で北周時代の安伽墓が発掘された。2003 年 8 月 1 日に文物出版社から出版された『西安北周安伽墓』には、安伽墓の構造と出土文物が詳しく説明されている（陝西省考古学研究所 2003: 25, 34）。まず、正面屏風第一の「奏樂舞蹈図」の画面上部には、前方に 4 人、後方に 6 人が描かれている。前方の左から 2 人目は主人であり、両側の 2 人が楽器を演奏し、右端の人は缶を持つ召使と考えられる。図

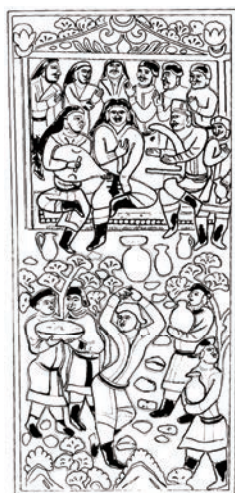


図3.6 奏楽舞蹈図『西安北周安伽墓』2003



図3.7 奏楽宴飲舞蹈図『西安北周安伽墓』2003

を見ると、後方の6人は、片手のみを胸元から首の高さに上げている。考古学と中国音楽史の文献を調べたところ、この姿勢に対応する楽器が想定されず、片手のみではあるが、拍手が描かれている可能性があると考えられる。次に、正面屏風第六の「奏楽宴飲舞蹈図」の画面下部の右側には、2人が「奏楽舞蹈図」と同じく片手のみを首の高さに上げている姿が描かれている。手は胴から離れて舞手に向けられており、拍手が描かれている可能性があると考えられる。『西安北周安伽墓』及び孫武軍の「北朝隋唐入華粟特人墓葬図像的文化与审美研究」（孫武軍 2012:221）にも、拍手する姿と明記されている。手拍子でリズムを取っているとも、称賛の拍手であるとも考えられる。

5.3.1.6 「拍手高歌女坐俑」

1953年に西安南郊草工場坡村に発掘された北朝墓の中から声を発していると考えられる女性の俑1体が出土した。現在の保管場所は不明である。この俑は、両手を顔の位置に上げ、平行に開き、口が開いていることから、声を掛けているか歌っているかのどちらかであると考えられる。一方、陝西省文物管理委员会による発掘報告書「西安南郊草工場坡村北朝墓の発掘」には、「拍手高歌女坐俑」と記されている（陝西省文物管理委员会 1959:285-287）。拍手しながら歌っているともできないわけではない。



図3.8 拍手高歌女坐俑『西安南郊草工場坡村北朝墓の発掘』1959

5.3.1.7 「彩絵陶院落」

1981年に河南省淮陽于庄で発掘された「彩絵陶院落」に、6体一組の陶楽俑が発見された。博物館のホーム

ページには、男の俑は正座し、赤い服を着て、拍手しているとある。『中原文物』に掲載された「淮陽于庄漢墓発掘簡報」（駱崇礼・駱明 1983:1-3）には、合掌俑と名づけられているが、それに関する説明はない。写真を見ると、物を持っていると考えられなくはないが、両掌を交差させ当てようとする瞬間が造形されている可能性もある。



図3.9 彩絵陶院落『淮陽于庄漢墓発掘簡報』1983

5.3.1.8 「銅鼓残片笙歌紋飾」

雲南省晋寧石寨山で発掘された「銅鼓残片笙歌紋飾」であり、発掘時期、現在の保管場所は不明である。中国古代の笙歌を演奏している姿が描かれている。先述の「試以漢代音楽文献及出土文物資料研究漢代音楽史」（陳 1998:18）には、船先の1人が楽器を持ち、後方の複数の歌手が歌いながら手拍子を拍つとある。画面を見ると、歌手の両手は胸先から肩の位置まで上がり、大きく広げられている。拍手の可能性はあるが、手を上げて歌っている可能性もあると考えられる。



図3.10 「銅鼓残片笙歌紋飾」『試以漢代音楽文献及出土文物資料研究漢代音楽史』1998

5.3.1.9 「戦国水陸攻戦紋銅壺」

1965年に四川省成都市百花潭中学から出土した「戦国水陸攻戦紋銅壺」である。四川省博物館の館長盛建武は、2018年8月21日のインタビュー^{*14}でこの銅壺について、「上段は戦国時代の採桑の場面を描いている。桑葉を摘む人と運ぶ人が描かれているが、木の下



図3.11 戦国水陸攻戦紋銅壺「四川省博物館」

で大人が舞っている。舞い手の隣で 2 人の采桑女が舞い手の方を向いて拍手している」と述べている。「戦国水陸攻戦紋銅壺」は戦国時代（前 475-前 221）の遺物であり、拍手が描かれているとすれば、漢代以前に拍手遺物が存在することが確かめられたことになる。但し、写真のように肘を伸ばして拍つ拍手は、一般的な拍手の拍ち方ではないので、拍手であると断ずることはできない。

5.3.1.10 「司馬金龍墓女楽俑」

1965 年 山西省大同市石家寨で発掘された司馬金龍墓耳室及び前室北側において出土した 12 体の女性の楽俑のうち、左上の女楽俑は、拍手する姿が造形されている可能性がある。これらの楽俑は大同市博物館に保管されており、高さは平均すると 15-20.5cm、服装はどれも同じであるが、姿勢はそれぞれ異なる。左上の正座している女楽俑は、左手首が欠けているが、拍手している俑である可能性がある



図 3.12 司馬金龍墓女楽俑
『大同北魏平城絲路遺珍』
2015

考えられる。大同市考古学研究所による「大同北魏平城絲路遺珍」（古 2015：21-32）には、「両手を上げて拍手している」と記されている。

5.3.2 拍手であるとする言説があるが写真から確認できない遺物

5.3.2.1 「七槃舞」

1950 年に山東省沂南県で出土した漢代壁画「七槃舞」であり、現在は四川博物館に保管されている。1957 年 8 期の『文物参考資料』に掲載された「論盤舞」（馮 1957:11）によると、古代舞踊の一種である七槃舞では、手を楽器とともに拍ち槃舞を伴奏する。漢代壁画「七槃舞」を見ると、画面中央の女性が舞い、右下の人は弄玉をしている。両掌を開いてはいるが、あくまで弄玉であり拍手しているのではないと考えられる。



図 3.13 七槃舞『論盤舞』1957

5.3.2.2 「楽舞飲茶画像」



図 3.14 楽舞飲茶画像『漢代的茶文化』2005

河南省南陽市麒麟崗で出土した後漢（25-220）の宴会場面を描いた「楽舞飲茶画像」であり、現在は南陽漢画館に保管されている。画面は 5 人で、左端の人は楽器を演奏しており、残り 4 人は音楽を鑑賞しながら話している。画面を見る限り、拍手する姿は明確ではないが、複数の記事が、右から 2 人目が拍手していると記している（張敦「漢代的茶文化」（張 2005）、「从画像石看漢代如何搞 party」（山茶の流芳地 2015））。しかし、現時点で発掘報告書は未刊行である。両掌を当てようとする瞬間が造形されている可能性がなくはないが、杯などを持っている可能性が高いと考えられる。

5.3.2.3 「楽舞図」

浙江省徐州市銅山県苗山に出土した後漢（25-220）の宴会場面を描いた漢画像石「楽舞図」であるが、個人蔵であり非公開である。写真を見る限り、拍手する姿勢は見出だせないが、2019 年 11 月に画像研究者孫宝山はインタビュー^{*15}で、図中の 1 人が手拍子として手を拍っているとの見解を示している。



図 3.15 楽舞図 個人蔵

5.3.2.4 「北壁二原石」

山東省微山県兩城郷に出土した漢代扁鵲祠堂「北壁二原石」である。2014 年に王洪震は「漢画像石所反映的医学与養生」で、画面右側で手を大きく広げている人は、手を拍っていると述べている（王 2014: 46-59）。しかし、現在の保管場所とは不明である。



図 3.16 北壁二原石『漢画像石所反映的医学与養生』2014

5.3.2.5「甘肅酒泉丁家閘墓室壁画」

1977 年 5 月、甘肅省博物館と酒泉教育局は、酒泉及び嘉峪関で発掘調査を行い、丁家閘村の近隣で、魏晉十六国時代(220-420)と考えられる大、中、小型墓を発掘した。その M5 西壁第三階における「燕居行楽図」には、拍手が描かれている可能性がある。画面中央の机の左側には 2 人の女性が見えるが、左側の人とは踊り、もう 1 人は手を拍っているように見える。謝敏の「酒泉丁家閘門墓室壁画探析」(謝 2015:12)には、音楽と舞踊のリズムをとる手拍子であると述べられている。



図 3.17 甘肅酒泉丁家閘墓室壁画『酒泉丁家閘門墓室壁画探析』2015

5.3.2.6「北壁浮彫」

2005 年第 3 期『文物』に掲載された「西安北周涼州薩保史君墓発掘報告」(西安市文物保護考古研究所 2005:12)に、この史君墓の遺物についての説明がある。史君墓は安伽墓から 2.5 キロ離れた北周時代の墓である。写真では見にくいですが、発掘報告には、左側に描かれている主人の柱を挟んだ右側に位置する侍従が手を拍っていると記されている。手を拍っているようでもあるが、両手を差し出しているようにも見える。



図 3.18 北壁浮彫『西安北周涼州薩保史君墓発掘報告』2005

5.3.2.7「宴飲百劇図」

1960 年河南省新密市牛店鎮で発掘された打虎亭漢墓から、壁画「宴飲百劇図」が発見された。発掘報告書は見つけられず、現在の保管場所は不明である。『文化研究』に掲載された巫允明の「中国古舞文化鈎沈—漢墓壁画与器物上の楽舞百戯」



図 3.19 宴飲百劇図『中国古舞文化鈎沈—漢墓壁画与器物上の楽舞百戯』2018

壁画与器物上の楽舞百戯」(巫 2018:57)には、左 2 人目に座っている男性は手を拍っていると記されている。しかし、写真からは確認できない。

5.3.2.8「撫琴・長袖・出喪」

江蘇省徐州市沛県に出土した漢代の画像石「撫琴・長袖・出喪」であり、CCTV 民俗チャンネルの紀要「石の史詩—漢画像石に近づく」(郭 年不詳)*16 第四編で紹介された画像である。



図 3.20 撫琴・長袖・出喪『CCTV』

現在の保管場所は不明である。画質は悪く確認できないが、左 2 人の女性が長袖舞を演じ、1 人が琴を弾き、右の女性は座して拍手していると説明されている。

5.3.2.9「彩絵陶舞蹈俑」

河南省済源市桐花溝で発掘された後漢(25-220)の「彩絵陶舞蹈俑」であり、王蔚波「試論河南漢代彩絵陶俑芸術」(王 2009:33)と巫允明の「中国古舞文化鈎沈—漢墓壁画与器物上の楽舞百戯」(巫 2018:63)に踊りながら拍手していると記されている。しかし、俑の掌は外側に向けられ、両掌を合わせる拍手動作が見られない。舞踊の身振り動作の中の手の動きと考えられる。



図 3.21 彩絵陶舞蹈俑『試論河南漢代彩絵陶俑芸術』2009

5.3.2.10「彩絵百戯楽舞陶俑群」

河南省博物館に保管されている「彩絵百戯楽舞陶俑群」である。2012 年に河南博物院は偃師市で 23 体の「彩絵百戯楽舞陶俑群」を入手した。漢代の俑で出土



図 3.22 彩絵百戯楽舞陶俑群『河南博物院徵集漢代彩絵楽舞百戯陶俑群』2016

地域は不明、吹簫俑 6 体、吹埙俑 2 体、持物伎楽俑 6 体、拍手俑 2 体と、腕なし楽俑 3 体、百戯俑 3 体、舞俑 1 体である。前右 2 人目の拍手俑は、写真からははっきりと確認できないが、両手を上げ、掌を合わせ

て拍手しているようにも見える。もう 1 体の拍手俑は、中列左 3 体目で、両手を胸先まで上げ、右手を上、左手を下にして、両掌を向き合わせて拍手しているように見えるが、写真からそれは明確でない。熊麗萍の「河南博物院徵集漢代彩繪樂舞百戲陶俑群」（熊 2016:77-79）には、拍手が造形されていると記されている。

5.3.2.11 「対牛弹琴図」

長らくネット上で写真が公開されていた漢画像石の「対牛弹琴図」は、描き方の特徴から、後漢（25-220 年）末期と推測される。「対牛弹琴」は、戦国時代の公明儀が牛のために音楽を演奏した話で、後漢に撰せられた「牟子理惑論」に現れる。「対牛弹琴図」の全体は、横幅 67cm、高さ 100cm であると説明されていたが、発掘時期、

発掘場所、保管場所は不明、現在はリンクがなく、発掘報告書、論文も見あたらない。中央で琴を演奏する人に対して、左



図 3.23 対牛弹琴図

側の牛が手を拍っているように見える。手が 1 本しか描かれていないので、拍手であるのかは明確ではないが、手を拍っているとすれば、称賛の拍手であると考えられる。右側の 3 人は観客であると考えられる。

5.3.2.12 「孔子拝老聃図」

江蘇省徐州市に出土した漢代「孔子拝老聃図」であり、現在は馬鞍山博物館に保管されている。壁画全体の長さ 147cm、幅 110cm で、画面は上下二段に分けられている。



図 3.24 孔子拝老聃図「馬鞍山博物館」

下段は孔子が老子に謁見し教を乞う場面を描いているが、図に示した上段は闘技の場面を描いており、長い矛で突き合う 2 人の後方で、それぞれ 2 人が声を掛けながら拍手で応援しているように見える。しかし、描写が荒いので拍手であるかははっきりと確認できない。馬鞍山博物館の展示のキャプション^{*17}には、観客として、拍手していると記されている。

5.4 不明の拍手

文献資料に拍手と記されているが、写真が存在しないため、拍手する可能性が判断できない例を挙げる。

5.4.1 「鐘鼓管弦楽団画像石」

2009 年に出版された馮建志・呉金宝の『漢代音楽文化研究』（馮・呉 2009:188）は、河南省南陽七里園東漢墓から出土した後漢（25-220）の鐘鼓の楽団を描いている画像石について論じている。1 人の演者は手拍子として拍手していると記されている。

5.4.2 「新野樊集撃鼓歌唱画像磚」

2011 年に出版された李榮有の『漢画像的音楽学研究』（李 2011:107）には、河南省南陽新野樊集で発掘された「撃鼓歌唱画像磚」を例に、漢代の画像には、手を拍ちながら歌う場面が数多くあることが、説明されている。

6. 終わりに

本稿では、考古資料から拍手の可能性のある例を取り上げ、それらの造形や描写について、特徴や表現方法を検討することを目的とした。拍手であるかどうか判断が難しい例、どのように拍っているか判然としない例も多いが、拍手であることが明確である場面の例を、数多く提示することができた。手の拍ち方に関して、文献研究からは、実際にどう拍たれていたのか知ることにはできないが、拍手の可能性が高い考古資料からであれば、それらを具体的に知ることができる。それらの例を提示した本稿の資料は拍手研究に貢献しうるのであると考える。以下、若干の考察を述べておこう。まず、考古資料にみられる拍手の多くは、音楽とともに拍たれている手拍子である。そのことから、手拍子としての拍手、すなわち、舞踊のリズムに合わせて手を拍つ行為、演奏の一部として手を拍つ行為が、漢代において頻繁に行われていた行為であることを改めて知ることができた。また、観客が称賛するために拍手していると検討される例も、それほど多くはないが存在することがわかった。この時の観客の称賛が、手拍子による称賛であるのか拍手で称賛しているのかまではわからないが、音楽や舞踊に対する喜びや称賛を表現する行為として手が拍たれていたことがわかる。次に、拍手とは言っても、考古資料にみられる拍手はそれぞれ異なる拍ち方が造形され描かれていることから、さまざまな姿勢でいろいろな拍ち方がなされていたことがわかる。手を広げて拍つ例、近づけて拍つ例、伸ばして拍つ例、縮めて拍つ例、胸先で拍つ例、頭上で拍つ例、左右の掌をピタリと合わせて拍つ例、掌を交差させて拍つ例など、文献からは知ることができない拍ち方の差異と多様性の存在を、考古資料から知ることができる。そのことは、拍手が日常的な振る舞いであるとともに、状況に応じてさまざまに変化しうる振る舞いであることを示すものでもある。拍手に関する考古資料の情報は今後増えていくかもしれないが、漢代を中心に網羅的に調査した本報告は、中国における拍手の起源を探るために不可欠な資料になっていると考える。

註

- *1 本稿の漢籍・中国語文献の書名及び引用文は原則として日本の常用字体を用いているが、必要に応じて原書の字体を用いた。
- *2 表1の遺物の評価において、論は論文・専門書、記は新聞記事・雑誌記事・研究者のブログ記事、報は発掘報告書、博は博物館の展示キャプション、筆は筆者の判断を示す。
- *3 <http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1391> (济源博物館 西漢複袖陶坐俑 2021年12月15日取得)
<http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1386> (济源博物館 西漢複袖陶坐俑 2021年12月15日取得)
- *4 <http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1393> (济源博物館 漢復袖陶拍手俑 2021年12月15日取得)
- *5 <https://baike.baidu.com/item/%E8%A5%BF%E6%B1%89%E8%B5%B5%E6%B0%8F%E5%AD%A4%E5%84%BF%E5%9B%BE/5025417> (西漢趙氏孤兒図 2021年12月15日取得)
- *6 <https://baike.baidu.com/item/%E5%8C%97%E9%AD%8F%E5%BD%A9%E7%BB%98%E6%9D%82%E6%8A%80%E8%83%A1%E4%BF%91/17351801?fr=Aladdin> (北魏彩繪雜技胡俑 2021年12月15日取得)
- *7 http://www.xcmuseum.com/db_app/search.aspx (許昌博物館 2021年12月15日取得)
- *8 <https://artsandculture.google.com/asset/%E4%BB%99%E4%BA%BA%E5%85%AD%E5%8D%9A%E5%9B%BE%E7%9F%B3%E5%87%BD/VwGGx473NhAhpA> (四川博物院 仙人六博図石函 2021年12月15日取得)
- *9 http://k.sina.com.cn/article_2197376813_p82f94f2d02700ahry.html?from=cul&display=0&retcode=0 (中国芸術品收藏 漢《彩繪陶樂舞俑》 2021年12月15日取得)
- *10 <http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1387> (济源博物館 西漢複袖陶打拍俑 2021年12月15日取得)
- *11 <https://www.guangzhoumuseum.cn/history03-03.asp> (広州博物館 陶舞俑与陶樂俑 2021年12月15日取得)
- *12 http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog_669e82e701018135.html (図説漢朝の漢画像石-漢朝の戯劇院と遊樂場 2021年12月15日取得)
- *13 <http://www.chinabuddhism.com.cn/tp/2017-03-04/5009.html> (中国仏教協会 敦煌壁画 254窟 尸毗王本生故事画(割肉救鳩) 2021年12月15日取得)
- *14 <http://www.yidianzixun.com/article/0Jr4utHh> (文博在線 盛建武：一方銅壺銘記時代瞬間 2021年12月15日取得)
- *15 <https://baijiahao.baidu.com/s?id=1651150490097454752&wfr=spider&for=pc> (古物鑑蔵部落 漢画像石は民族芸術瑰宝 拓片は貴重文化財富 2021年12月15日取得)
- *16 http://www.cctv.com/folklore/special/C13447/20050302/101534_1.shtml (央視國際 各具特色的漢画專題 陰柔纖巧 摹形追神—沛縣龍固新出土的一組漢画像石 2021年12月15日取得)
- *17 <http://www.mas-museum.com/news/2002/2/20022804373719262916.html> (馬鞍山博物館 2021年12月15日取得)

引用文献

- 1) 秦睿澤・矢向正人「中国の古代文獻にみる拍手の起源」『比較文化研究 125』2017:23-36.
- 2) 矢向正人「魏志倭人伝に現れる搏手からの検討」『芸術工学研究 34』2021:19-36.
- 3) 吉田賢抗『新釈漢文大系八十六巻 史記六(世家中)』明治書院 1979:576-577.
- 4) 矢向正人「拍手の起源を探索」『芸術工学研究 24』2016:21-41, 59.
- 5) 矢向正人「天の逆手:古事記の国譲りに現われた手拍ちの検討」『芸術工学研究 31』2019:19-31.
- 6) 楊鵬・矢向正人「中国の拍手に見られるネガティブな感情反応」『芸術工学研究 32』2020:9-29.
- 7) 張慶捷『考古発掘報告積圧問題』科学出版社 2011.
- 8) 王先勝「中国考古学的現状 任務及未来趨勢:古代紋飾与古代研究新趨勢」『社会科学論壇』2019(2):130-141.
- 9) 徐百柯「中国考古学の父:第一位遺跡発掘人李濟」『北京青年報』2005年6月29日.

- 10) 胡成芳『泥土之魂:济源漢代陶器』中州古籍出版社 2015.
- 11) 李彩霞「济源西窯頭村 M10 出土陶塑器物鑑賞」『中原文物』2010(4):101-104.
- 12) 李曉音「济源出土漢代陶俑的美感表現」『東方收藏』2015(5):53-56.
- 13) 劉惠「济源出土的漢代舞樂俑淺析」Journal of Jiyuan Vocational and Technical College(济源職業技術学院学報) 2017:8-12.
- 14) 河南文物考古研究所「河南济源市桐花溝十号漢墓」『考古』2000(2):78-89.
- 15) 河南省博物院「济源西澗溝三座漢墓的発掘簡報」『文物』1973(2):46-54.
- 16) 劉俊喜「大同雁北師院北魏墓群」『文物』2008(2):53-55.
- 17) 張懷寧「河南洛寧東漢墓清理簡報」『文物』1987(2):37-42.
- 18) 「遺産」『山西青年(SHANYIYOUTH)』2013年7月7日:8.
- 19) 吳艷麗「許昌博物館藏百戲俑賞析」『理財・收藏版』2018(2).
- 20) 楊育彬・張長森・趙青雲「靈宝張湾漢墓」『文物』1975(11):75-93.
- 21) 「大英博物館展覽漢代六博俑及其背後的生死觀念」『澎湃新聞』2017年6月15日.
- 22) 遊曉鵬「踏着伝説尋踪六博」『大河報』2015年1月9日.
- 23) 王惟一「失伝の六博遊戲」『大河報』2018年7月31日.
- 24) 博古格物「什麼是六博」『博古格物』2019:3.
- 25) 中国芸術品收藏「漢《彩繪陶樂舞俑》」『SINA 新聞』2018年8月22日.
- 26) 济源市文物工作隊「济源市東街明代壁画墓発掘簡報」『中原文物』2013(1):10-16.
- 27) 南陽漢代画像石編集委員会『南陽漢代画像石』文物出版社 1985.
- 28) 富順人「1.4 米高!富順北湖公園發現古墓,出土鎮墓將軍俑!」『搜狐新聞』2018年7月24日.
- 29) 河南博物館『帶你走進博物館:河南省博物館』文物出版社 2006.
- 30) 蔣金治・徐衛・朱佩麗「漢晋時期浙江青瓷堆塑谷倉罐」『東方收藏』2012:50-52.
- 31) 淮北市文物局「安徽省淮北市發見漢代画像石祠」『東南文化』2019(6):19-25.
- 32) 陝西省考古研究院 靖邊県文物管理弁公室「陝西靖邊県楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓発掘簡報」『考古与文物』2017(1):3-26.
- 33) 陳萬鼎「試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史 7:討論漢代打擊奏樂器与西南夷民族樂器」『故宮文物月刊』1998:9-24.
- 34) 孫武軍「北朝隋唐入華粟特人墓葬圖像的文化与審美研究」『西北大学博士論文』2012
- 35) 陝西省考古学研究所『西安北周安伽墓』文物出版社 2003.
- 36) 陝西省文物管理委員会「西安南郊草工場坡村北朝墓的発掘」『考古』1959(6):285-287.
- 37) 駱崇礼・駱明「淮陽于庄漢墓発掘簡報」『中原文物』1983(1):1-3.
- 38) 古順芳「大同北魏平城絲路遺珍」『收藏家』2015(3):21-32.
- 39) 馮漢驥「論盤舞」『文物參考資料』1957(8):9-12.
- 40) 張敦「漢代的茶文化」『SINA 新聞』2005.(月日不明)
- 41) 不明「从画像石看漢代如何搞 party」『山茶の流芳地』2015年4月7日.
- 42) 王洪震「漢画像石所反映的医学与養生」『休閒読品・天下』2014:46-59.
- 43) 謝敏「酒泉丁家閭門墓室壁画探析」『湖北美術学院』2015:1-28.
- 44) 西安市文物保護考古研究所「西安北周涼州薩保史君墓發掘報告」『文物』2005(3):4-33.
- 45) 巫允明「中国古舞文化鈎沈—漢墓壁画与器物上的樂舞百戲」『文化研究』2018:56-63.
- 46) 郭翠瀟「石の史詩—漢画石に近づく」CCTV. 2005.
- 47) 王蔚波「試論河南漢代彩繪陶俑芸術」『四川文物』2009(2):31-36.
- 48) 熊麗萍「河南博物院徵集漢代彩繪樂舞百戲陶俑群」『中原文物』2016(2):77-79.
- 49) 馮建志・吳金宝「漢代音樂文化研究」河南大学出版社:2009.
- 50) 李榮有『漢画像の音楽学研究』京華出版社:2011.

画像出典

- 図 1.1 西漢複袖陶坐俑-1
<http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1386> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 1.2 西漢複袖陶坐俑-2
<http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1391> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 1.3 漢復袖陶婦人俑
河南文物考古研究所「河南濟南市桐花溝十号漢墓」『考古』2000(2): 89.
- 図 1.4 漢復袖陶拍手俑
<http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1393> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 1.5 西漢趙氏孤兒図
<https://baike.baidu.com/item/西氏孤儿图/5025417> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 1.6 紅釉舞樂俑群
Journal of Jiyuan Vocational and Technical College(濟源職業技術學院學報)2017:11.
- 図 1.7 西漢擊掌綠褐釉陶俑、西漢擊掌褐釉陶俑
吳艷麗「許昌博物館藏百戲俑賞析」『理財・收藏版』2018(2):41.
- 図 1.8 拍手俑
吳艷麗「許昌博物館藏百戲俑賞析」『理財・收藏版』2018(2):41.
- 図 1.9 仙人六博図石函
<https://artsandculture.google.com/asset/%E4%BB%99%E4%BA%BA%E5%85%AD%E5%8D%9A%E5%9B%BE%E7%9F%B3%E5%87%BD/VwGGx473NhAhpA> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 1.10 東漢綠釉六博俑
楊育彬・張長森・趙青雲「壺寶張湾漢墓」『文物』1975(11): 89.
- 図 1.11 東漢六博俑
https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_1693651 (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 1.12 彩繪陶樂舞俑
http://k.sina.com.cn/article_2197376813_p82f94f2d02700ahry.html?from=cul (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 1.13 濟源東街明代壁画 筆者撮影
- 図 2.1 西漢複袖陶打拍俑
<http://www.jysmuseum.com/bencandy.php?fid=89&id=1387> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 2.2 彩繪百戲陶俑 筆者撮影
- 図 2.3 彩繪百戲陶俑 筆者撮影
- 図 2.4 陶舞樂雜技俑
河南省博物院「濟源泗潤溝三座漢墓的發掘簡報」『文物』1973(2): 52.
- 図 2.5 北齊黃釉磁扁壺
河南博物館『帶你走進博物館: 河南省博物館』文物出版社 2006.(頁未確認)
- 図 2.6 東漢婺州窯青瓷堆塑罐 筆者撮影
- 図 2.7 婺州窯青瓷堆塑人物罐
蔣金治・徐衛・朱佩麗「漢晉時期浙江青瓷堆塑谷倉罐」『東方收藏』2012:51.
- 図 2.8 宴飲奏樂画像磚
http://www.360doc.com/content/16/0328/11/4958641_545837507.shtml (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 2.9 漢代画像石祠后龕右側壁石
淮北市文物局「安徽省淮北市發見漢代画像石祠」『東南文化』2019(6): 21.
- 図 2.10 宴樂図
陝西省考古研究院 靖邊縣文物管理辦公室「陝西靖邊縣楊橋畔渠樹壕東漢壁画墓發掘簡報」『考古與文物』2017(1):8.
- 図 3.1 陶舞俑与陶樂俑
<https://www.guangzhoumuseum.cn/history03-03.asp> (2021 年 12 月 15 日取得)

- 図 3.2 四人樂舞銅飾牌-1
http://blog.sina.com.cn/s/blog_51ec9abf0102wzxo.html (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.3 四人樂舞銅飾牌-2
http://blog.sina.com.cn/s/blog_51ec9abf0102wzxo.html (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.4 漢画像石
http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog_669e82e701018135.html (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.5 敦煌壁画 254 窟 尸毗王本生故事画(割肉救鳩)
<http://www.chinabuddhism.com.cn/tp/2017-03-04/5009.html> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.6 奏樂舞蹈図
陝西省考古學研究所『西安北周安伽墓』文物出版社 2003:26.
- 図 3.7 奏樂宴飲舞蹈図
陝西省考古學研究所『西安北周安伽墓』文物出版社 2003:34.
- 図 3.8 拍手高歌女坐俑
陝西省文物管理委員會「西安南郊草工場坡村北朝墓的發掘」『考古』1959(6):285.
- 図 3.9 彩繪陶院落
駱崇礼・駱明「淮陽于庄漢墓發掘簡報」『中原文物』1983(1):2.
- 図 3.10 銅鼓殘片笙歌紋飾
陳萬竊「試以漢代音樂文獻及出土文物資料研究漢代音樂史 7:討論漢代打擊奏樂器与西南夷民族樂器」『故宮文物月刊』1998:11.
- 図 3.11 戰国水陸攻戰紋銅壺
<http://www.yidianzixun.com/article/0Jr4utHh> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.12 司馬金龍墓女樂俑
古順芳「大同北魏平城絲路遺珍」『收藏家』2015(3):22.
- 図 3.13 七槃舞(煉瓦画像)
馮漢驥「論盤舞」『文物參考資料』1957(8):11.
- 図 3.14 樂舞飲茶画像
http://blog.sina.com.cn/s/blog_59a2f3d20101fv0d.html (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.15 樂舞図(漢画像石)
<https://baijiahao.baidu.com/s?id=1651150490097454752&wfr=spider&for=pc> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.16 北壁二原石
王洪震「漢画像石所反映的医学与養生」『休閒読品・天下』2014.(頁未確認)
- 図 3.17 甘肅酒泉丁家閘墓室壁画
謝敏「酒泉丁家閘門墓室壁画探析」『湖北美術學院』2015:12.
- 図 3.18 北壁浮彫
西安市文物保護考古研究所「西安北周涼州薩保史君墓發掘報告」『文物』2005(3):9.
- 図 3.19 宴飲百劇図
巫允明「中国古舞文化鈎沈—漢墓壁画与器物上的樂舞百戲」『文化研究』2018:57.
- 図 3.20 撫琴・長袖・出喪
http://www.cctv.com/folklore/special/C13447/20050302/101534_1.shtml (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.21 彩繪陶舞蹈俑
<https://auction.arttron.net/paimai-art46000107/> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.22 彩繪百戲樂舞陶俑群
熊麗萍「河南博物院徵集漢代彩繪樂舞百戲陶俑群」『中原文物』2016(2):79.
- 図 3.23 对牛彈琴図
<http://song8500.blog.sohu.com/157816817.html> (2021 年 12 月 15 日取得)
- 図 3.24 孔子拜老聃図
<http://www.mas-museum.com/news/2002/2/20022804373719262916.html> (2021 年 12 月 15 日取得)

芸術工学研究

投稿要領／論文ひな形

平成15年10月1日制定、平成20年7月10日一部改正、平成21年5月29日一部改正、
平成23年9月20日一部改正、平成25年1月11日一部改正、平成26年12月17日一部改正、
平成28年10月26日一部改正、平成29年4月1日一部改正、平成30年4月1日一部改正
令和3年4月21日一部改正

1. 投稿者

- 1-1. 投稿者（共著の場合少なくとも1名）は、本研究院の教職員（学術研究員、教務・技術・事務職員を含む）、訪問研究員ⁱ、本学府学生、本学の客員教員、非常勤講師および紀要編集ワーキンググループ（以下「ワーキンググループ」という。）が依頼した者とする。ただし、本学府学生の場合、博士後期課程の学生は投稿に際し指導教員の同意を必要とする。また、修士課程の学生は、本研究院の教職員との連名の場合のみ、投稿を許可される。
- 1-2. 原則として、一人の投稿者に許可される投稿数は、単名もしくは連名第一著者としての投稿数は1編以内とする。ただし連名の場合であっても第一著者でない場合の投稿数は制限しない。

2. 掲載記事および記事の区分

掲載記事は、英文あるいは和文で書かれた未発表のもの（口頭発表を除く）とし、性質により、以下のよう
に区分する。投稿原稿が以下のいずれであるかについては、投稿者の意思を確認の上、ワーキンググループ
が決定する。

2-1. 研究論文

研究論文は、独創的な結果、考察あるいは結論等を含むもので、学術的・社会的発展に寄与するもの
とする。

2-2. 作品（または、「作品解説」）

作品（演奏・上演等も含む）に関する紹介と解説とする。解説の中には、制作の背景と目的、独創性、
意義などに関する説明が求められる。

2-3. 評論

評論等は、学説、著作および作品・演奏その他に関する論評および科学的技術的あるいは社会的文化
的事柄に関する論評とする。

2-4. 研究報告

研究報告は、研究論文に準じる研究成果を含むが、論文と同等の完結を要求されない自由度を有する
形態のものとする。

2-5. 資料

資料は、公開することが学術的・社会的に意味のある実験記録、調査記録、教育記録、その他研究・
教育資料とする。

2-6. その他

上記のひとつに明確に区分されない事項とする。

3. 掲載記事1編の長さ

図表、英文アブストラクト、その他を含めて、原則として、刷り上り20ページ以内とする。超過ページお
よびカラーページの出版経費は、原則として、投稿者の負担とする。

4. 原稿の書式等

作成にあたっては、別紙の「原稿作成・投稿要領」を参照し、所定の書式に従うこととする。

5. 投稿原稿の受付日および受理日について

- 5-1. ワーキンググループが投稿者から原稿を受け付けた日を当該原稿の受付日とする。
- 5-2. 投稿原稿の採否は、査読の結果に基づいてワーキンググループが決定する。ワーキンググループは原稿の訂正を求めることができる。またワーキンググループは、必要に応じて、投稿者に原稿内容の修正を求めることができる。
- 5-3. 査読は、査読規定によって行われ、その結果についてはワーキンググループが責任を持つ。
- 5-4. 本誌に掲載された記事についての責任は著者が負う。
- 5-5. ワーキンググループにおいて論文の採択を決定した日を当該原稿の受理日とする。

6. 紀要の掲載順序は以下の順とする

- 6-1. 研究論文、作品、評論、研究報告、資料、その他の順で配列する。
- 6-2. 英文記事から和文記事の順に配列する。
- 6-3. デザイン人間科学、コミュニケーションデザイン科学、環境・遺産デザイン、コンテンツ・クリエイティブデザイン、デザインストラテジーの各部門順とする。
- 6-4. 原稿受け年月日の順に配列する。
- 6-5. ワーキンググループによる企画記事等は、ワーキンググループが掲載場所を決定する。

7. 別刷り

投稿記事の別刷りは、1編につき10部までを無償とし、これを超えるものについては投稿者の負担とする。

8. 原稿の取り下げ

原稿を取り下げたい場合は、著者全員が署名・捺印をした理由書を、速やかにワーキンググループ長に提出する。ただし、採択後の取り下げは認めない。一度取り下げた論文の再投稿は、すべて新原稿としての投稿となる。

9. 著作権

- 9-1. 2条で挙げた研究論文等の著作権は、その投稿者が保持する。
- 9-2. 研究論文等の投稿者は、芸術工学研究院に対して、あらゆる利用行為を許諾する。ただし、この許諾は、投稿者の著作者人格権に影響を及ぼすものではない。
- 9-3. 前項の許諾は、投稿が受理された時点で行なわれたものとし、不採択とされた場合は、その決定の時点で撤回されたものとする。
- 9-4. 研究論文等における既存の著作物の利用（引用・転載等）に関し権利者との間に生じた紛争については、投稿者がその任に当たる。

10. 九州大学学術情報リポジトリへの登録

紀要に掲載された研究論文等は、投稿者の承諾を経て、九州大学学術情報リポジトリに登録する。

i 一訪問期間が少なくとも一年であり、本研究院での研究期間が半年以上経過している方

「芸術工学研究」原稿作成・投稿要領

（平成21年11月19日制定、平成22年11月30日一部改正、
平成29年4月1日一部改正、令和2年12月16日一部改正）

本文書式

・投稿原稿、著者版下はテンプレートファイルを使用して作成する。

図版

・画像、表などの線画等、全ての図版データを、著者が各自で版下原稿本文内にレイアウトする。

投稿時の提出形式・方法

下記①②を管理棟1Fの紀要編集ワーキンググループのメールボックス（下記住所へ郵送も可）に提出すると同時に、①③の電子データを紀要編集ワーキンググループのメールアドレス宛（kiyou-ed@design.kyushu-u.ac.jp）に送信すること。

なお、共著者及び指導教員（学術研究員または学生の場合）のメールアドレスをCCに入力して送信すること。

① 投稿添付用紙

② A4 サイズ用紙に出力した版下原稿ハードコピー 3部

- ・カラー印刷希望の場合にのみカラーで出力すること。
- ・1部にのみ著者の名前を入れ、他の2部には著者の名前を入れないこと。

③ 版下原稿PDFファイル

- ・著者の名前と所属が入ったファイルとそれらを抜いたファイル（2種類）

問い合わせ

九州大学大学院芸術工学研究院 紀要編集ワーキンググループ

〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原 4-9-1

kiyou-ed@design.kyushu-u.ac.jp

研究論文

(※掲載決定後に編集WGで記載)
受付日：20**年**月**日、受理日：20**年**月**日

和文タイトル

和文サブタイトル

Title

Sub-Title

(単語の頭文字は大文字で統一すること。 例：The Study of Art and Design....)

九大花子¹

KYUDAI Hanako

芸工二郎²

GEIKO Jiro

大橋三郎³

OHASHI Saburo

著者名：【フォント】和文：明朝体，英文：Times

【サイズ】 10 ポイント

Abstract

著者抄録

【フォント】ローマン体 (Times 等)

【サイズ】10 ポイント 【行送り】12 ポイント

150～200 語を目安に、改行無し (1 パラグラフ) で記述する。上記の目安を超える場合にも、「著者情報および連絡先」と併せて必ず左の段に納めること。また、一人称代名詞は極力使用しないこと。本文が英文の場合は和文 (明朝体，9 ポイント) の抄録とする。

著者情報および連絡先の記載方法について

- 1 著者情報および連絡先は、1 ページ目、左段の Abstract の下に表記するものとし、左右の段の最下行が、ほぼ同じ位置となるように割り付けること。
- 2 1 行目の行頭は本文が和文の場合は、「連絡先：」(英文の場合は「Corresponding Author:」) とし、連絡先となる著者の氏名 (本文が和文の場合は和文、英文の場合は英文)、その後に電子メールのアドレスを記載する。
- 3 次行以降は、著者番号順に著者の所属を、本文が和文の場合は和文・英文の順 (英文の場合は英文・和文の順) に記載する。ただし、所属が同じ場合は同じ番号とし、非常勤講師の場合は、九州大学非常勤講師の後にセミコロン (;) を置き、本務の所属を併記すること。
- 4 芸術工学研究院、芸術工学府、芸術工学部に所属する者は別紙著者情報一覧を参考とすること。
- 5 【フォント】和文：明朝体，英文：Times 【サイズ】7 ポイント 【行送り】12 ポイント 【字下げ】2 行目以降は、半角 2 文字分の字下げをする。

連絡先：九大花子，hanako@design.kyushu-u.ac.jp

1 九州大学大学院芸術工学研究院デザイン人間科学部門

Department of Human Science, Faculty of Design, Kyushu University

2 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース

Communication Design Science Course, Department of Design, Graduate School of Design, Kyushu University

3 九州大学非常勤講師：〇〇会社××研究所

Part-time Lecturer, Kyushu University; ***** Institute, ***** Corporation

1. 大見出し：【フォント】ゴシック【サイズ】9 ポイント 【行送り】16 ポイント

本文は、

【フォント】明朝体□□□□□□□□□□□□□□□□

【サイズ】9 ポイント□□□□□□□□□□□□□□□□

【行送り】16 ポイント□□□□□□□□□□□□□□□□

【1 行文字数】25 文字詰め□□□□□□□□□□□□□□□□

【一段落の行数】43 行□□□□□□□□□□□□□□□□

【スタイル】標準

を用いる。

新しい段落は、このように 1 コマ空けてから書く。文

章の区切りには、読点としてカンマ“,” を、句点として

丸“。”を用いる (括弧を付して補足説明する場合は、こ

の例のように本文の句読点の前に括弧を挿入し、括弧内

の文章の最後には句読点を付けない)。

注、文献番号は、1), 2) または 3)~8) のように上付文字で

書く。

1.1. 小見出し：ゴシック，9 ポイント

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

ページの余白は以下のとおりとする。

3. 图表

本文と図表の間は、1 行以上空ける。また、次ページの見本のように、図番・図名は図の真下中央に、表番・表名は表の真上中央に配置する。

図名、表名は、日本語で記述し、図番および表番はそれぞれ、図 1、表 1 のように通し番号としてゴシック体で書く。本文で引用するときは、図 1、表 1、・・・とする。

図表はキャプションと一緒にテキストボックス内に挿入すると、割付けが容易である。

図、表または式が 1 段に収まらない場合は、2 段にまたがってよいが、この場合は当該ページの最下段あるいは最上段に配置し、本文が図表等によって中断されないようにする。

図1 キャプションは邦文：ゴシック，英文：Timesの8ポイント，行送りは12ポイント，2行目以降降下げ

最後のページの左右の段の最下行は、ほぼ同じ位置となるように割り付けること。

注

- 1) 【フォント】 邦文：明朝体，英文：Times
- 2) 【サイズ】 7ポイント
- 3) 【行送り】 12ポイント
- 4) 【字下げ】 複数行にわたる場合は，2行目以降，半角三文字分の字下げをする。

参考文献

- 1) 【フォント】 邦文：明朝体，英文：Times
- 2) 【サイズ】 7ポイント
- 3) 【行送り】 12ポイント
- 4) 著者，表題，出版社（雑誌名），発行年，発行巻号数，ページの順に表記する。
- 5) 【字下げ】 複数行にわたる場合は，2行目以降，半角三文字分の字下げをする。

※「注」と「参考文献」の両方が混在する場合は、注ではアスタリスク(*1,*2…)を用い、本文中で参考文献との違いを明確にすること。

執筆者紹介

秋田 直繁（九州大学大学院芸術工学研究院）

池田美奈子（九州大学大学院芸術工学研究院）

石井 達郎（九州大学大学院芸術工学研究院）

伊原 久裕（九州大学大学院芸術工学研究院）

大井 尚行（九州大学大学院芸術工学研究院）

尾本 章（九州大学大学院芸術工学研究院）

工藤 真生（九州大学大学院芸術工学研究院）

田上 健一（九州大学大学院芸術工学研究院）

陳 晟宇（九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コンテンツ・クリエイティブデザインコース）

矢向 正人（九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門）

芸術工学研究

九州大学大学院芸術工学研究院 紀要

Geijutsu Kogaku: the Journal of Design, Kyushu University

2022, Vol. 36

発行日：2022年3月1日

編集発行：九州大学大学院芸術工学研究院紀要〔芸術工学研究〕編集ワーキンググループ◎

編集ワーキンググループ：鮫島俊哉〔ワーキンググループ長〕

井上朝雄、徳久 悟、齋藤俊文

福岡市南区塩原4-9-1 〒815-8540 tel：092-553-4400

印刷：株式会社ミドリ印刷

